

エスペラント



Verda Placo

printempo

みどりのひろば

2008

N-ro 1

Harima Esperanto-Societo (はりまエスペラント会)

Saluto

昨年12月に、姫路で、はりまエスペラント会としての初めてのザメンホフ祭を開催し、ふだん姫路と加古川に分かれて学習している皆さんが初めて顔を会わすことができました。その中から、今後もっと交流しようという気運が生まれました。

そのひとつが、会報の発行です。さいわい、加古川の南場敏郎さんに編集制作を引き受けていただけることになりました。タイトルは、以前の姫路エスペラント会が出していた“Verda Placo” (みどりのひろば) を引き継ぎます。当面は、季刊発行の予定です。

“Verda Placo”は、1966年3月に創刊し、71年12月の45号まで出て、それ以降、休刊になっていました

(“Informilo”と称するものが、75年5月まで不定期に出されましたが・・・)。当時は、ガリ版のものでした。

会員の皆さんには、エスペラント以外の活動や趣味についても披露していただき、交流や情報・意見交換の場として活用していただくようお願いします。

(峰芳隆)

姫路国際交流協会の登録更新

はりまエスペラント会は、2007年2月に姫路国際交流協会の登録団体に認可されましたが、2008年度も登録更新を申請しました。ところで、同協会では、次のような経緯でエスペラント会の認知度が上がっています。

同協会は、昨年9月にベルギーの姉妹都市シャルルロア市の児童画展を開催することを計画していました。ところが、7月末になっても同市と連絡が取れず困っていたようです。ちょうどその時に、シャルルロア市から来たエスペランティストのジョルジュ・ソソアさんを伴って挨拶に訪問しました。そこで、これは良いところに来た、シャルルロア市の状況を知りたいと質問されました。ソソアさんからは、同市では市長のスキャンダルがあり、選挙などで市政が混乱しているとの実情が伝えられました。そして、ソソアさんは、自分は教員で、また自治会の役員でもあるので、教育担当の新しい副市長と連絡できる、と仲介を申し出ました。協会からはぜひお願いしたいと依頼されました。ソソアさんの帰国後、峰を經由した電子メールでの数回のやり取りの結果、市間の連絡も再開し、児童画が届き、無事に展覧会が開かれました。ということで、同協会からは、あの時、もしソソアさんが来ていなかったら、児童画展が開けなかったかも知れないと、とても感謝されています。もともと、これは、公式には記録されていない、担当者どまりのことだと思われませんが。 (峰芳隆)

私の独り言

私には以前から気にかかった絵があった。それは、阪神大震災に遭った子が描いた「黒い虹」の絵である。あの子はもう七色の虹を描けるようになっただろうか。そしてもうひとつはアフガニスタンの子供達の「地雷ではなく、花をください」の絵である。それから皆さんは、震災の神戸の焼け跡に咲いたひまわりの花の話をご存知だろうか。

そんな時、三木市で「地球フェスタ いのち」をテーマとした絵の公募展があるのを知った。私はこの話を絵で表したいと思い描いた。画面の上の方に七色の虹、下には地雷で爆発した大地、その上に黒い虹、黒い虹の上に七色の虹に向って飛んでいく“ひまわり”を描いた。そんな絵だから絵としては幼稚な出来なのだが応募した。

Sunfloroj floras
Mi ne devas forgesi
La katastrofon

加古川市には、8月19日の俳句の日に因み喫茶画廊協会が、自作の俳句をいろいろな画材で描いた作品を毎年7月ごろに募集している。私は昨年この絵に上記の Haiko (俳句) を書いて応募した。我ながら厚かましいことをしたものだと思きれているが、私のこの絵の意味を解ってくれた人がいるだろうか。などと思いをめぐらしている。

馬場祝栄

3つの思い出すこと

Bonan tagon! Estimataj ĉiuj... 自信がないので per japana lingvo (なんだかルー語みたい) 先ずは verda placo の reeldono に謝辞と喜びを申し上げます。40数年前に峰氏はじめ諸先輩方に出会って、姫路の講習会でエスペラントを知り、少しだけかじりつき、英語なんて全くダメな私にはそれなりの苦しみもありましたが、初級だけは終えたものの、次の級では挫折でした。当時姫路に住まいし、小さな製パン屋さんの2階1室で、妻子3人暮らし、出勤前に市場や市内のパン売り屋さんに配達バイトを済ませて、電車に乗って高砂までの往復車中が私の勉強時間でした。

思い出の1つが、当時のメンバー間で “kio serpento kaj mano?” というエスペラントが話されて、初心者の私には何のことやら?でしたが。なぜか今も頭から離れません。皆さん解りますか? 「なに蛇と手」→「なんじゃとて」と言う傑作な和製エスペラントが息抜きで使われていました。

2つ目は姫路から高砂に転居して、姫路での講習会宣伝のためにポスター貼りに、市議会選挙用の立て看板を選挙終了翌日の早朝に、いくらか拝借してエスペラントのポスターに転用して募集に協力したことです。Bedaŭrinde その時の受講者が育っていません。その頃から仕事も忙しくなり、エスペラントも遠のき、以来昨年まで40年ほど関わりなく、辞書、テキスト類、一切捨てて、頭もエスペラントを捨てていました。加古川で講習会を知り、改めて勉強中です。

3つ目、これも私にとっては忘れられない印象を与

えたものでした。1967年11月にエスペランティストの由比忠之進が、首相官邸前でベトナム戦争反対を訴えて、焼身自殺を挙行した時のワイシャツが、当時の姫路エスペラント会に送られてきて、皆で哀悼したことです。あの時は自分の身に置き換えて、大変なショックを受けました。あの時代を通過してきた者として、決して忘れてはならないと思っています。

今年から学習のひとつとして、“La Movado”の作文教室に挑戦しています。3月号から担当者の方が女性に変わられ、出題もいくらか易しくなったようです。皆さんも参加されては如何でしょうか。現在、私は *senlabora pensiulo* で時間はあるのですが、年齢もたくさんあり学習は進まず、ぼちぼちですが、ボケ防止になれば大変結構な事と、仲間入りさせていただいています。これからも宜しくお願い致します。

坂本敏明

Eta Demando

“B. v. iu instruu al mi .” (pere venonta Verda Placo)

“bontagon “って有りか否や？ bonvenon, bongusta, bonvojaĝon, bonvolu, 等々、bona の造語がたくさん見受けられますが、エスペラントでよく使われる *bonan tagon* をはじめ、*~n matenon*, *~n vesperon*, *~n nokton* など、挨拶を気軽に使用したい時に *Bontagon!* 等と言ったり、書くのはないのでしょうか？ 失礼になるのかな？

坂本敏明

“Memuprezento”

Mia nomo estas TADA-Ryuuji.

Mi komence renkontis al Esperanto, kiam mi estis elementlernato. Mi legis la libron, ke “エスペラントの話” Hutabatei Simei en la libraro de mia patoro.

Mi eklernis lingvon de Esperanto antaŭ kvar dek kvara jaroj tiam studento de Kagawa Univ. Nur, mi lernis Esperanton dum 4 jaroj en la studento-periodo. Krome, mi estas malfervora klubmembro.

Mi naskiĝis en la 1944. Mi laboris en la kompanio de produktaj furomaĵoj.

Mi loĝas kun edzino en la urbo Nishiakashi. Mi havas filon kaj filinon. Ili geedziĝis. Mi havas 5 nepojn. Nomo de mia filino estas Midori (Verda).

Mi ne havas hobiojn speciale, sed mia sinlaŭdo havas duon. Unue, mi skribis traktato por gradiĝo per Esperanta lingvo. La temo estas “Studioj pri ŝanĝo de oligosakaridoj ekstraktataj el sengrasigita sojo per la bakterio Escherichia coli” en laboratorio de Biologia Kemio en Kagawa-univ. (Ricevita la 21an de Januaro 1966) Kredeble tio estas unua en la mondo. Due, mi faris aeroplanon per planigi en Ameriko. Ĝi nun lokas en mia laboratorio “Lab-ESPO”. Nomo de mia aeroplano estas “La ESPERO” .

Mia laboratorio estas en la urbo Inami. Bonvole
iru al mia laboratorio. Antaŭe mi volas komuniki.
Komprenable mi ne vivas tie.

多田龍二



Saluton ! Mia nomo estas HUZIWARA Katuhiro.
Mi estas instruisto de matematiko.
Mi ludas francan fagoton en la filharmonio de
Kakogawa.

(Okazos la koncerton en la 29a de Aprilo !)
Kaj mi havas guston en kartoĵonglado. Iam vi vidos
ĝin !

藤原 勝博

Karaj geamikoj ! Bonan tagon !

Mia nomo estas Takeda Hanae.

世界共通語という言葉に惹かれて、峰先生に教わり始めて1年過ぎました。10年後に Esperanto で少しでも会話できることを夢見ています。現実には亀よりカタツムリより遅く、のらりくらりとしています。夢が夢に終わらないようみなさんについて行きたいという思いは充分ありますのでよろしくお願いします。

家族構成は息子二人、それぞれ結婚して千葉と高槻に住み、孫は5人です。私たち二人には両親はすでに亡く、夫婦二人暮らし25年。気楽にしておりますので、いつでも、なんでも誘ってください。そしてわが家にもおいでください。

趣味としては、菩提寺流折紙、二條流煎茶そしてヤマハ大正琴とヴィオラをすこし。普段は歩くの大好き。一緒に高御位山に登りませんか？

以上自己紹介でした。忘れていました。おしゃべり大好きです。

Ĝis la revido !! 竹田華恵

Renkontoj

En marto 2003 mi eklernis Esperanton per koresponda kurso . Per la kurso mi unue emociiĝis de Zamenhofa ideo kaj konsekvenca pacismo de Leo Tolstoj.

De tiam jam kvin jaroj pasis, dume mi renkontis diversajn esperantistojn en la libroj kaj la kursoj.

En aprilo mi konas Harima-Esperanto-Socion kaj
tuj partoprenis en la kurso . Esperanta mondo
ekvastiĝis iom post iom en mian koron. Mi tre ĝojis.

En septembro la jaro 2003 mi partprenis en Friska
Lernejo, kiu okazis en la urbeto Misato de la
gubernio Wakajama. Mi pasigis agrablan tempon,
kvankam mi ne povis paroli esperante .

En oktobro 2004 mi iris al Yatugatake Esperanto
Domo kaj renkontis kelkajn esperantistojn. Unu el
la esperantistoj estas s-ro Sasamori, kiu loĝas en
la najbara urbo de mia hejmloko. Tiam mi konis la
nomojn de du esperantistoj (徳田六郎、中島恭平) .
Mi surpriziĝis, ke s-ro Tokuda estas la patro de
mia amiko, kiu estis la lernanto de la sama
mezlernejo. Rilate al li , s-rino Hoki Tokuda, kiu
estas la edzino de verkisto Henry Miller, estas lia
filino.

Poste, mi konis en la libro, ke TAKASUGI Itirou
estas esperantisto. Ĝis tiu tempo mi sciis nur la
nomon kiel tradukisto. Mi legis lian verkojn (極
光の影、夜明け前の歌、スターリン体験など) kun
granda emocio.

Lastatempe mi aĉetis la lernolibron “ Vojaĝanto
en Esperant-Lando” por relerni Esperanton. Nun mi
malrapide vojaĝas en Esperanto-Lando.

Ankaŭ de nun mi petes vian gvidon.

南場敏郎

Zamenhofa Festo en Himezi, 2007

はりまエスペラント会の初めてのザメンホフ祭を2007年12月16日の午後、姫路のイタリア料理&ケーキの店“Anemone”で開催しました。会場の制約で、Zamenhofa Festoらしいことは出来ませんが、日ごろは顔を合わすことの少ない姫路と加古川の会員、それに新旧の会員の初めての顔合わせにもなりました。

参加者は、青木日登志、稲田正昭、木根万知子、久保田俱視、坂本敏明、佐野邦夫、竹田華恵、多田龍二、中村雅子、南場敏郎、馬場祝栄、吉田信子、峰多鶴子、峰芳隆と元会員の尾上（旧制・佐野）十糸子の15人（敬称略）



Printempa Festivalo en Himezi

3月9日、イーグレひめじで開催された姫路国際交流センターの第4回国際交流スプリング・フェスティバルに参加して、パネルと絵本などの展示を行いました。また、エスペラントと当会の説明資料も配布しました。参加したのは、市内で活動する国際交流団体20グループ（同センターの登録団体は33）で、沢山の来場者でにぎやかでした。なお、今年は、初めての試みとして各グループが制作したパネルが、同じフロアで1週間展示されました。会員で、来場されたのは次の皆さん（敬称略）。
8日（前日準備）：稲田正昭，佐野邦夫，峰芳隆
9日：坂本敏明，南場敏郎，多田龍二，馬場祝栄 kun la edzo, 竹田華恵 kun la edzo, 中川幸子，峰芳隆。
また、岡山エスペラント会の原田英樹さん（姫路医師会勤務）も来場され、参考資料をいただきました。さらに、昨年8月の講習会に参加された松浦四朗さんも顔を出されました（松浦さんは、神戸にお住まいで、社会人学生として姫路獨協大学の大学院で言語学を専攻され、今春卒業されたそうです。入会はされていませんが、独習を継続されているそうです）。



Gasto de Germanio

ドイツのエスペランチスト（60歳の男性，元銀行のシステム技術者），ミヘル・ヴォーターさん（Michael Woter）が，3月22日と23日に来訪しました。当初は，23日（日）に姫路城を見物する予定でしたが，雨の予報で，22日（土）に変更しました。急な変更で十分な連絡ができませんでした。急な変更で「イーグレひめじ」に，大前知子さん，馬場祝栄さん，松田邦子さん，峰多鶴子さんと峰芳隆が集り，一緒に「石焼ビビンバ」を食べた後，馬場さん，松田さん，峰の案内で姫路城を見物。土曜日のためか，天守閣はまるでラッシュ時の混雑でした。その後，お城をぐるりと一周散策しましたが，サクラは開花前でした。22日と23日峰宅に宿泊し，24日京都へ。ミヘルさんの目的は，3か月かけて九州・中国・四国を自転車で旅行することでしたが，姫路には京都に自転車を置いて，電車で来ました。食事をしながら，これまでに自転車で旅行した国々の話など，興味尽きない話を聞きました。この後，大阪からフェリーで宮崎に行き，そこから自転車旅行をはじめるということでした。

（峰芳隆）



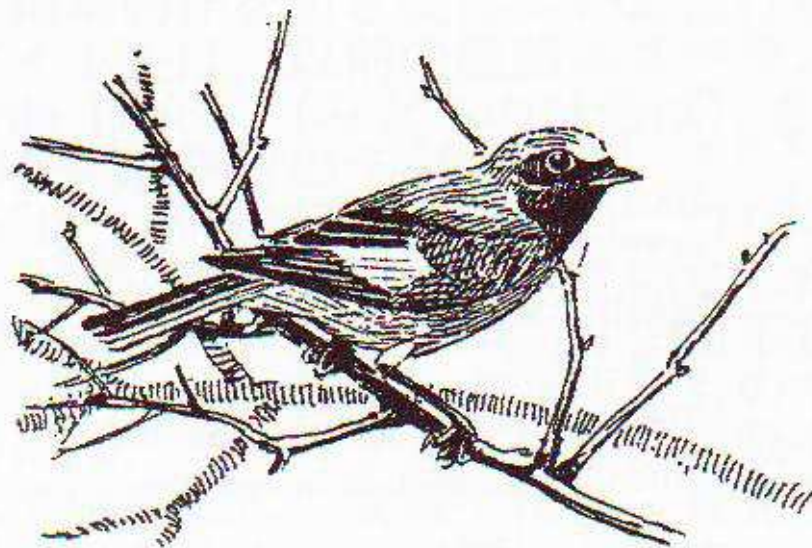
はりまエスペラント会 2007年の活動記録

- 1月11日：イーグレひめじで学習会開始（吉田信子さん、木根万知子さん、中川幸子さん入会）
- 1月25日：姫路国際交流センターの登録団体申請
- 2月8日：久保田俱視さん入会
- 3月8日：大前知子さん入会
- 3月11日：姫路国際交流センターの第3回国際交流
会 スプリングフェスティバルにパネル展示で参加
- 4月25日：イーグレひめじで2時間体験講座
（中村雅子さん入会）
- 7月：加古川総合文化センターで2時間体験講座開催
（1人：入会なし）
- 4月26日：姫路の学習会に、ブラジルのIldete Barbosa
Aquinoさん来訪（大本はりま本苑来訪者で、
高砂市の塩谷誠さん宅に滞在中）
- 5月26日：「リビング加古川」に加古川の学習会紹介
- 6月20日：「あいあいAI」550号の「はりま何でも知り隊」
に「エスペラント語って何？」と姫路の学習会紹介
- 6月21日：ラジオ関西「ラジ関アフタヌーン 谷五郎です」
の電話インタビューを峰芳隆が受けて、約10分間
エスペラントのことを話した。
- 7月1日：「SUNSUNあさひ」7月号に姫路の学習会紹介
（4月12日取材）

- 7月23日～25日：ベルギーのGeorges Sossoisさん来訪
(峰宅に2泊, 塩谷宅に1泊)
- 7月30日：イタリアのMauro La Torreさん等3人来訪
(姫路城見物)
- 8月2日：世界大会Antauxkongreso 2の旅行団(34人)
の姫路城見物に対応
- 8月3日：チェコのエスペラント旅行団が姫路見物
(対応できず)
- 8月4日～11日：横浜で第92回世界エスペラント大会
- 8月21日：ネパールのRazen Manandharさん来訪
(姫路城見物)
- 8月25日：イーグレひめじで2時間体験講座
(女3, 男1: 入会なし)
- 9月7日：朝日新聞「声」欄に, 馬場祝栄さんの
「エスペラントを学びませんか」
- 9月15日：曲田忠房さん入会
- 11月, 12月：姫路と加古川の学習会休止
- 12月16日：ザメンホフ祭(姫路 Anemone)

はりまエスペラント会のあゆみ

- 1965年 5月 : 姫路エスペラント会創立
- 1965年 8月 : 東京で第50回世界エスペラント大会
- 1965年10月 : 姫路労働会館で第1回講習会を開催
(以降, 74年10月まで12回開催)
- 1965年12月 : 姫路でザメンホフ祭開催
- 1966年 3月 : "Verda Placo"創刊
- 1966年11月 : 第1回姫路文連フェスティバルで
「平和ポスター展」を開催
- 1967年 2月 : 第5回姫路文化賞を受賞
- 1967年 5月 : KLEG賞(団体)を受賞
- 1968年 5月 : 第16回関西エスペラント大会を姫路工大で開催
- 1969年 7月 : 高砂エスペラントクラブ発足
- 1969年11月 : 高砂市立勤労会館で講習会開催
- 1969年12月 : 高砂で合同ザメンホフ祭開催
(1975年以降, 姫路・高砂での活動を休止)
- 2000年10月 : 学習会を高砂の峰宅で再開
- 2003年 1月 : 加古川総合文化センターで学習会開始2003年1月
会の名称を「はりまエスペラント会」に変更
- 2005年 5月 : 姫路文連の50周年記念フェスティバルで展示
- 2006年10月 : 加古川総合文化センターで体験講座開催
(坂本敏明さんと末森資枝さん入会)
竹田華恵さん入会(峰宅で学習開始)



Pri niaj sekvantaj kunsidoj

5月と6月の学習会の休止について

5月と6月の学習会は、加古川と姫路ともに休みます。これは、峰の個人的な事情によるものですが、ご了解をお願いします。7月以降については、後日連絡します。(峰芳隆)

4月の姫路学習会 — 会場変更

4月24日(木)午後2時～4時ですが、いつもの「イーグレ姫路」が「姫路菓子博」のため使えません。そこで、「大本はりま本苑」を使わせていただくことになりました。同本苑では、これまでもエスペラントの学習が行われたことがあります。山陽電車「亀山」駅から約5分のところにあります。

大本はりま本苑(姫路市飾磨区三宅1丁目10, 電話079-235-0257)

“Verda Placo” (みどりのひろば)

n-ro 1 2008年 4月 5日 発行

発行所 : はりまエスペラント会 峰 芳隆

高砂市北浜北脇 29-16

編集者 : 南場 敏郎

加古川市平岡町城の宮 13A-102

nanba.tosiro@w8.dion.ne.jp

梶野 田曲

エスペラント



Verda Placo

somero

みどりのひろば

2008

N-ro 2

Harima Esperanto-Societo (はりまエスペラント会)



加古川左岸からの高御位山

6月の酒

曲田 忠房

私は、そこらへんにゴロゴロいるアルコール依存症の一人に過ぎないし、そのうえ酒を飲むときにはそれなりのこだわりをもって飲むための言い訳とする。

5月も下旬になるとスーパーの店頭には青梅が出はじめ、つづいて少し日にちをおいてサクランボが並びはじめる。私はこの時期になると青梅の一夜漬けとサクランボを肴として焼酎やウイスキーを飲むことにしている。これをしないと私の夏は始まらないと思っているし、もう何十年も続いた習慣となっている。

青梅の一夜漬けを肴にするようになったキッカケについてはさだかでないが、サクランボについては忘れられない思い出が残っている。

40年前の事になるが、私のエスペラントの師である伊東三郎が東欧からイスラエルにかけて旅行することになり、中労ロンドが中心になって旅費の一部を集めることになった。私は、ちょうどボーナスが支給される時だったのでこれを使ってもらうことにした。ボーナスから飲み屋のツケを支払って、残ったぶんを持っていった。東大赤門前の路地を入ったところにある、じめじめした土間に裸電球がぶら下がる木賃アパートに先生を訪ねてお金を渡すと、借用書を書き始めたので「先生そんなものいりませんよ」というと、じゃあ少し飲んでいってくれということになった。

上がりこんでしばらくすると奥さんが買い物から帰ってきて、ちゃぶ台の上に並べたのは黒パンとサクランボ、それとオーシャンウイスキーだった。飲み始めてからは興をそそる話しばかりで、日本滞在中のエロシェンコの話しや、戦前北千住の長屋をアジトに地下活動をしていたころの話し、そしてこのアパートは旧逓信省の所有だが区役所に南京虫を駆除させて居座っている、といった話しを聞きながら結局ウイスキーを2本飲んでしまった。食べる物が黒パンとサクランボではだいぶ酩酊もしたが、その時は、東欧ではパンと塩で遠来の客を歓迎するというから、

それなりに歓待してくれたんだろうぐらいに思っていた。

しかし、それから15年後に私は一枚の絵画を見てその思いは変わった。その絵画はヤコポ・バッサーノという画家の描いた宗教画で、16世紀北イタリアの田舎の宿屋を背景にしてキリスト復活のエピソードである「エマオでの夕食」の場面が描かれたものである。絵にはキリストを中心にして二人の弟子、そして食卓の上にはパンと葡萄酒のほかにはチーズとオレンジ、一折りの麦穂、それに熟したサクランボが描かれている。そして説明文には、パンはもっとも重要な意味をもち、麦穂は博愛を表し、サクランボは祝福された者達の歓喜を表すとあった。その絵を見てから、あの時のもてなしにはこのような意味があったのかとの思いにいたるとともに、先生のペンネームの由来である、なにをやっても「一等で御座候」というのにも納得がいった。

以後毎年この時期になると、サクランボでウイスキーや焼酎を飲むようになったのだけれど、酔いがまわってくると、先生が機会ある度に繰り返して言っていた「こういう時代だからこそエスペラントなんだよ」という言葉が聞こえてくるのがつらい。そして、いつまでたっても（おそらくは一生）Bonan tagon Esperantisto であることが恥ずかしい。

6月に飲む酒はホロ苦い味がする。

Rememoro de mia patrino

BABA Tokie

Kiam miaj gefiloj estis infanoj, ĉiu somere mia familio iris al Uogataki-Aitebenajo. Tiu loko estas komforta, ĉar vento freŝa, akvo de rivero estas malvarma kaj verdaj arboj. Tie ni naĝis kaj ekskursis. Ni havas agrablan tempon. Unufoje mia patrino iris tien kun ni. Ŝi tre ĝojis kaj kontentis. Ŝi feliĉe ripozis sur roko. Post iom da tempo, unu ruĝlibelo sidiĝis sur ŝia ŝultro.

Ruĝa libelo

Sidas sur ŝultr' avina !

Vidu etuloj

Mi kaj Esperanto

吉田信子

エスペラント語との出会いは、20歳の頃、亀岡の大本の講習会を受けて、とても楽しかったです。1965年、ちょうど、第50回世界エスペラント大会が東京であり、その流れで100名ぐらいのエスペランチストが大本を訪れ、そのとき奉仕をしました。当時は姫路エスペラント会もとても盛んで、会合が楽しみでした。でも結婚で、すっかり遠ざかっていました。

エスペラント語と短歌のほか、小鼓を学んでいます。小鼓は12年ですが、夫の謡曲と合わせる独調というのを年に数回の能楽会でやらせていただいています。昨年の横浜の世界エスペラント大会の参加者が70名ほど、綾部の大本に来られた時も、皆様に披露させていただきました。

今年2月にアジア大会でインドへ、6月にはモンゴルのエスペラント大会にも行って来ました。2年後のアジアエスペラント大会はモンゴルで開催されます。皆さん一緒に行きましょう！

アジアエスペラント大会に参加して

大前知子

エスペラント教室に通っているとはいえ、まだ挨拶さえ満足にできない私にとって、アジア大会に参加など考えも及ばない事でしたが、吉田信子さんの熱心なお誘いもあり、インドの地を踏む事になりました。

大会当日の朝、ホテルからタクシーに乗り、バンガロールの町をまるでジェットコースターに乗っているかのごとく荒っぽい運転で、おまけに空気は埃っぽく、町はゴミだらけ、やっとの事で大会会場のコンベンションセンターに到着、ほっと胸をなでおろしました。

会場周辺は緑が多く、素敵な所でした。ロビーでは色んな国の人々が受付を終え、開会式を待っていました、エスペラント語で歓談する人、再会を喜び合う人、写真を撮る人撮られる人、とても和やかな楽しい雰囲気でした。

会場内では、アジアだけでなく世界各国からの参加があり、熱気が溢れていました。大会プログラム、講演もすべてエスペラントだけで、私には全く理解できなかつたけれど、スピーチされる方々の表情や言葉の調子を聴いていると、皆さんがエスペラント語を愛しておられる事がひしひしと伝わってきました。人類愛から生れた言葉・エスペラント語の素晴らしさを再認識し、もっともっと勉強しなければと思いました。

(大前さんは、久保田俱視さん、吉田信子さんと共に、大本のエスペラント普及会の旅行団に参加して、去る2月にインドで開催された第5回アジアエスペラント大会に出席されました。写真の立看板の右にしゃがんでいるのが大前さん)



昨年、2007年の夏は、横浜の *Universala Kongreso de Esperanto* の前後に、姫路城を訪れたエスペランチストの案内で大忙しでした。私たちが直接案内した人たちのことを記録しておきます。 (Mine Yositaka)

7月23日～26日：ベルギーの姉妹都市のジョルジュ・ソソア (Georges Sossois) さんが来訪。ソソアさんは23日と24日峰宅に2泊し、その翌日、高砂市伊保町の塩谷さん宅に1泊しました。ソソアさんは、24日に姫路国際交流協会の山本課長を表敬訪問しました。その折に、同課長からシャルルロア市との連絡が途絶えているので、仲介を依頼されました。ソソアさんによれば、シャルルロア市では市長スキャンダルによる選挙があったばかりで、市政が混乱しているためだろうということで、仲介を約束されました。ソソアさんが帰国後その約束を果たしたことについては、すでに本誌第1号で報告した通りです。同じ24日には、イーグレひめじの4階フロアで、集った会員に会っていただき (写真1)、そのあと姫路城を案内しました (同行は、竹田さん、小西成子さんと峰)。

7月30日：イタリアのマウロ・ラ・トレ (Mauro La Torre) さんとその友人夫婦の3人。大阪から広島へ行く途中の姫路城見物 (写真2) でした。同行したのは、竹田さんと峰多鶴子、峰芳隆。見物を終えて城を出るところで、ハンガリーのエスペランチストのグループに偶然出会いました。私たちが話すエスペラントを聞きつけたのです。彼等は京都に滞在して、日帰りで姫路へ来たと話していました。このような人は他にも少なくないようです。

8月2日：世界大会の *Antaŭkongreso 2* の旅行団 (大会前観光旅行で、京都～広島～倉敷・岡山～姫路～京都～横浜のグループ旅行。34人) の姫路城見物を案内しました。当初はお城のガイドだけということでしたが、車椅子の人が居て、その人がどうしても姫路城へ行きたいとのことで、その人を支援することも必要になりました。

一行は、バスで姫路駅前南の日航ホテル (旧・ホテルサンガーデン) に到着して、そこのバイキングで昼食。私も加わってプロの添乗員 (この女性の添乗員とは、後日横浜の世界大会の会場で再会しました。大会期間中の *Ekskursoj* = 観光の添乗の仕事だそうですが、エスペラントを学習を始めたいと本を買っていました) とエスペランチストの通訳添乗者 (高槻エスペラント会の中津正徳さん。この人はボランティア) と打つ合わせをしました。昼食後

バスで姫路城に向かうと、大手門のところに稲田さん、坂本さん、馬場さんと峰多鶴子が待っていました。

ところが、旅行団のメンバーは、バスの出発時間を確認すると後は、ほとんどバラバラに行動して、一緒に写真を取ることもできませんでした。バスの中で、姫路城の説明を一通りしておきましたが、城の中で私の案内を聞こうとする人は少数でした。それでも、全員時間通りにバスに戻り、無事に京都へ向かいました。

車椅子の人は、稲田さん、坂本さん、馬場さんの3人に、天守閣の下まで案内していただきましたが(写真3)、8月の炎天下、城の中の石段を人が乗った車椅子を運ぶのは大変な重労働だったと、申しわけなく思いました。

なお、馬場さんは、この時の体験を基にして、朝日新聞の声の欄に投書して、それが9月7日に「エスペラントを学びませんか」という見出しで掲載されました。

翌日の8月3日に、私(峰)のチェコの友人ペトロ・フルドル(Petro Chrdle)さんが世話をしたチェコ、スロバキア、フランス、デンマーク、イタリア、ハンガリーからの32人のエスペラント旅行団が、姫路城見物に来ましたが、私は翌日から世界大会の準備のため横浜に出発しましたので、対応できませんでした。この人たちとは、もちろん横浜で会いました。この旅行団は、京都に数日間宿泊して、外国人観光客用のJR レールパスを使って、広島、奈良、姫路などを日帰りで観光したそうです。

また同じ日には、神戸エスペラント会にも属している藤井富朗さんが神戸の姉妹都市である中国の天津から来訪中のエスペランチスト数人を姫路城に案内したそうです。

8月21日：ネパールのラゼン・マナンダール(Razen Manandhar)さんが来訪しました(写真4)。彼はネパールの新聞記者で、大会後も滞在して、西日本各地のエスペランチストに招待されて旅行中でした。ラゼンさんはデジカメ用の充電式電池と充電器を買いたいということで、電気店にも案内しました。

なお、ラゼンさんは、ブログ“Razeno blogas Esperante...”(<http://www.razeno.blogspot.com/>)でネパールからのニュースを発信しています。

写真 4



写真 3



写真 2



写真 1



Pri nia enigmodo "Kio mi estas?"

加古川と姫路の例会の「会話学習」の部では、**Kio mi estas?**という **Vorto-Enigmo** (単語当てクイズ) をしています。これは、各人が例題のようなクイズを作って、読み上げ、他の人はそれを聴いて書き取りし、答え合わせをするもので、作文能力と聞き取り能力向上、そして同時に単語を覚える、などを目的としています。

例題 1 (吉田信子さんの出題)

(demando) **Mi estas ruĝa frukto. Sur mia korpo estas multaj semoj. Kio mi estas?**

(solvo) **frago.**

例題 2 (多田龍二さんの出題)

(demando) **Mi estas blanka kaj mola manĝaĵo. Mia patrino estas sojfabo. Kio mi estas?**

(solvo) **tofu.**

学習の手順は次の通りです。

- 1) このような **enigmo** を、宿題として1人1題作成してくる。
- 2) その **enigmo** を読み上げ、他の人はそれを筆記する。
- 3) 出題者は、読み上げた文を白板に書き確認する。
- 4) 解答を確認する。

これは、もちろん学習をが目的ですから、難しい単語や複雑で長い文を避けて、できるかぎり聞き取れるような易しい単語と表現を使うようにお願いします。(Mine Yositaka)

Kio mi estas ?

Sakamoto

- ① Mi estas ruĝega frukto. Mia naskiĝejo estas malvarma kaj norda regiono. En iu bona tago mi estis enkestigita kaj sendita per Var-trajno. Bordaŭ mi alvenis al la bazaro en iu urbo.
- ② Mi havas kelkajn harojn ĉe ie parto. Mia formo de korpo estas mallonga bastono aŭ stango. Mi estas ĉefe fabrikita el plasto. Mi estas longa nur ĉirkaŭ 20 centimetrojn. En la mateno de ĉiu tago oni uzas min. Kaj lasta tempe, kelkaj homoj utiligas min pri la forton de ultra-soniko. ("Tamen tio koncernas min neniel")

Kubota

- ③ Mi loĝas en lageto kaj rivereto. Vi ludis kun mi en via infaneco ĉu ne ? Tamen vi ankaŭ povas trovi min en alia placo. Tie miaj fratoj viciĝas por esprimi belajn mizikojn.
- ④ En kurantajaro mi vizitis la teron, kion mi ne faris kelkjarajn. Mi restis tie dum dudek kvar horoj kaj tuj foriris. Mi nepre revenos post kvar jaroj.

Baba

- ⑤ Mi estas freŝa kaj dolĉa. Mia haŭto estas verda. Sed mia enhavo estas ruĝa aŭ flava. Ĉu mi estas frukto aŭ legomo? Mi kreskas en kampo. Sed oni vedas min en fruktovendejo. Plenaĝuloj kaj infanoj, ĉiuj amas manĝi min.

Mine

- ⑥ Mi havas buŝon, sed ne nazon, nek manoj, nek piedojn. Mi amas akvon, sukron, lakton, vinon kaj ĉion alian trinkeblan. Oni faras min el vitro aŭ plasto aŭ porcelano aŭ alia.

Ĉina najtingalo (相思鳥)

NANBA

Aboj longigas novajn ĝermojn. Sur la arbobedo diversaj floroj estas floranta. Ĉirkaŭte de freŝa verdaĵo monto de printempo estas luma. Tre plaĉas al mi intermonta akvofluo kaj milda vento. Diversaj floroj afable alparolas min. Renkontoj kun floroj kuraĉas lacon.

En printempo ankaŭ birdoj gaje pepas, kvankam ili tute ne vidigas siajn fingulojn kaŝinte de novaj folioj.

Tiam mi renkontis belan verdan birdon, kiu havas ruĝan bekon kaj pepas bele. Mi proksimiĝis al ĝi, sed ĝi ĉirkaŭflugis inter branĉetoj kaj ne forfluĝis. Dum kelka tempo mi ĝuis, ke mi observas la birdon.

Poste mi sciis, ke la nomo de la birdo estas “ĉina najtingalo”.
(相思鳥)

(注) 相思鳥 ; つがいのオスとメスをわけてしまうと、お互いになき交わすからこの名がついた。1930年頃中国からペットとして輸入されたものが逃げ出し、野生化した。1945年に一旦消滅したが1980年(日中国交回復)以降再び繁殖した。ウグイスやオオルリと営巣場所が競合するため特定外来生物に指定されている。



Haikoj

(注) 馬場祝栄 (ばば・ときえ) さんは、Tokie の筆名で、La Movado の「モバード俳壇」欄に毎回投稿されています。ここに紹介するものはこれまでに選ばれた掲載作品です。

Neĝo! nepeto
kriis, rigardis prujnon
sur la tegmento. (2004/12)

Kiel alaŭdo,
mi volas flugi alten
en la aero. (2005/03)

Apud lageto
iridoj floras flavaj -
Neniu scias. (2005/06)

Mi per kraĵono
krokizas kosmoskampon.
Blovetas al floroj. (2005/09)

Nepo fotita
per poŝtelefoneto,
ludas kun anas'. (2005/12)

Sur riverbordo
Kolzoj floras tapiŝe
Mi kun du nepoj. (2006/03)

Ondojn postkuras
Du nepoj sur strando; jen
kaptas ondetojn. (2006/08)

Vidu cikadon
elŝeligantan sur arb'!
Nepojn mi vokas. (2006/08)

Tokie

En taglibreto
postlasita de l' panjo
ginka folio. (2006/12)

En vesperruĝo
ruĝlibeloj dancas,
infanoj ĉasas. (2006/12)

En luna nokto
lude ĉas-tretis ombrojn
mi, knabinete. (2006/12)

Vagon-fenestre
Koro dancas de ĝojoj
neĝa pejzaĝo. (2007/02)

Pepas alaŭdo
en helverda kamparo
mi bicikladas. (2007/05)

Farbitoj floras.
Kun infanoj mi nombras:
Jen unu du tri. (2007/08)

Ruĝa libelo
sidas sur ŝultr' avina!
Vidu etulo. (2007/11)

Akvon ŝprucigas
novjara fajrobrigad'.
Jen ĉielarkoj! (2008/02)

Dancas kaj brilas
sur la dorso de nepo
nova tornistro. (2008/05)

使用済み切手を集めています Ni kolektas uzitajn poŝtmarkojn

高砂市社会福祉協議会が発行して、市内の全戸に『市政だより』と一緒に配布されている『高砂社協だより』に、写真のように「はりまエスペラント会」の名前がたびたび載っています（写真の第193号は7月発行）。

これは、会の事務局の峰宅に来る郵便物の使用済み切手を同協会の「善意銀行」に持参して寄付しているためです。

今後は、会の活動として集めたいと思いますので、皆さんの手元にも使用済み切手があれば、封筒から切り取って、例会に持って来てください。なお、郵送は送料の方が高くなりますので、必ず持参をお願いします。
(峰芳隆)

古切手・使用済みカード・ベルマーク等（※敬称略）

そねホーム	⋮	高砂市職員組合
木澤鉄工所(株)	⋮	はりまエスペラント会
内藤金属(株)	⋮	(株)井沢鉄工所
高砂今市郵便局	⋮	高砂市役所
高砂ろうあ協会	⋮	久保工務所
三菱製紙労働組合	⋮	自由空間
(財)高砂市施設利用振興財団	⋮	吉岡 榮子
緑化推進課みどりの相談所	⋮	匿名

15 第193号 高砂社協だより

学習例会を再開します Pri niaj sekvantaj kunsidoj

5月と6月休んでいた姫路と加古川の例会を再開します。今後の予定は次のとおりです。

★ 姫路 (イーグレひめじの国際交流センター会議室)

7月24日、8月28日、9月25日 (いずれも第4木曜日：当面は月1回です)。午後2時～4時。

内容は、『エクスプレス・エスペラント語』(7月は復習から始めます)と会話練習。

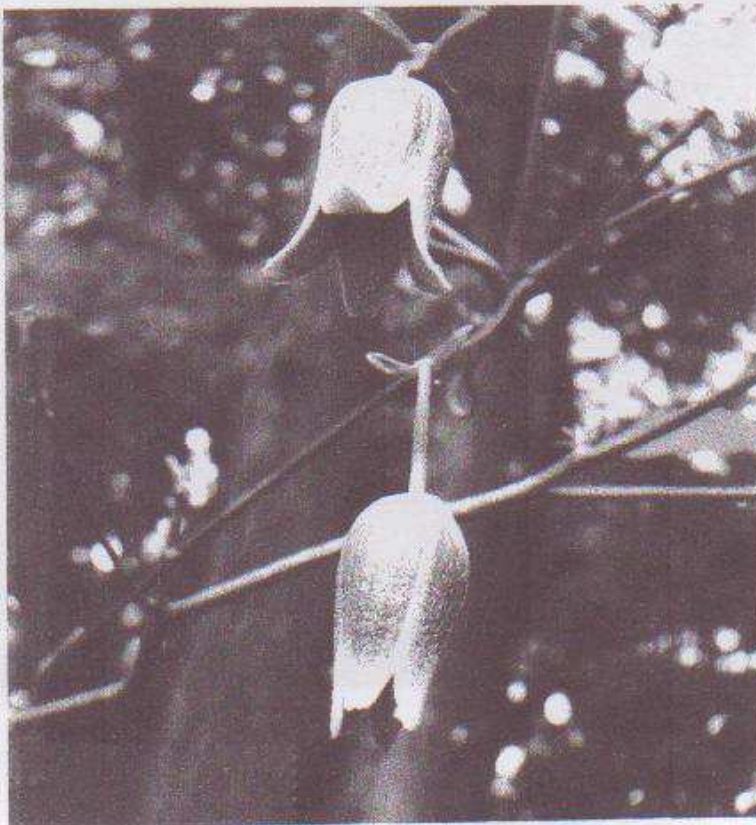
★ 加古川 (加古川総合文化センター会議室)

7月20日(第3日曜)、8月24日(第4日曜)、9月21日(第3日曜)。午後2時～4時。

内容は、会話練習と Enigmo “Kio mi estas?” など。

会場は、いずれも、午後1時から5時まで使用できます。

(Mine Yositaka)



編集後記

東北地方の山旅に出ようとした前日(6月14日)震度6強の「岩手・宮城内陸地震」が発生しました。またしても、関係部署が地震発生確率の極めて低い地域での地震です。

急遽予定を変更して、静岡県富士宮から東海道自然歩道を山中湖まで歩いてきました。

旅から帰ってくると早速、曲田さんから“6月の酒”という面白い原稿をいただきました。その中の曲田さんのエスペラントの師である伊東三郎氏のことをインターネットで調べていると栗栖継氏の“Kial kaj kiel mi failĝis esperantisto”に行き着き、これを面白く読んでいるうちに原稿が集まりだし、編集作業に取り掛かりました。当初は12ページがやっとかなと思っていたところ峰さんから、昨年のUKの前後に姫路城を訪れたエスペランチストの記事が入り、何とか前号と同じく16ページでまとめることが出来ました。

今後もどしどし原稿をお寄せいただきたくお願いします。直接エスペラントの関係していなくてもいいのではないのでしょうか。出来れば写真も添えていただければありがたく思います。

次号(秋号)は10月10日頃までにお寄せください。

“Verda Placo”(みどりのひろば)

n-ro 2 2008年 7月 10日 発行

発行所 : はりまエスペラント会 峰 芳隆
高砂市北浜北脇 29-16

編集者 : 南場 敏郎

加古川市平岡町城の宮 13A-102

nanba.tosiro@w8.dion.ne.jp

エスペラント Verda Placo



aŭtuno 2008

みどりのひろば

2008年 秋

N-ro 3

Harima Esperanto-Societo(はりまエスペラント会)



版画 中村雅子さん

Bonan tagon! Mi estas Masako Nakamura. 私がエスペラント語を初めて知ったのは小学4年生くらいの頃、何かの本で世界共通語としてエスペラント語というものが作られていることを知って、“すてきだなあ!”と感心しました。だけど周りにしゃべっている人もいなければラジオ講座もないし、それ以上エス語に関心を寄せることはありませんでした。

1990年代半ば、初めての海外旅行でドイツへ行き、せっかく行くのならその国の言葉を少しでも理解したいと思い、「ヒッポファミリークラブ」という会に加入しました。それは多言語の歌や会話のテープをひたすら聞いて口まねをして、赤ちゃんが自然に言葉を覚えるように、何カ国も同時に身につけようという趣旨の会でした。当時住んでいた広島を訪れる観光客は多く、ホームステイもたくさん受けました。一応、数カ国で挨拶は出来るようになったものの日常会話には及ばず、結局は英語に頼る有様。しかも私のつたない英語では会話を深めることも出来ずにもどかしい思いをしたこともあり、ヒッポは3年で辞めました。

2001年姫路へ越してきて、世界での理不尽な出来事(戦争など)を考えるにつけ、英語が世界共通語として幅を利かせていることが原因のひとつではないか、と思うようになりました。“エスペラント語は理想なのになあ。どうなったんだろうか。もう消滅してしまったのだろうか……。”と思っていたところ、たまたま版画の師である岩田健三郎氏から「ひとりから」という季刊誌をいただきました。(2005年.3.第25号)。そこに栗栖継氏の「日本人の遺言」と、ベルギーのエスペラントチストとの往復書簡を見つけて読んだ時の興奮とうれしさは忘れません。“エスペラントはまだ生きていて、ちゃんと使っている人たちがいるんだ!!”と。(そのわりにはこの原稿を書くにあたってもう一度パラパラとページをめくってみると、内容はすっかり忘れていました)。同時期「週刊金曜日」という購読誌でもザメンホフについての記事をみつけ、興味深く読みました。そして、姫路にエスペラント教室はないのだろうかと思って

いたところ、ミニコ紙で
 体験学習会の案内を見つ
 けたのです。2007年4
 月初めの体験学習会は、
 なんと峰先生と私の個人
 レッスン。いやあ・・・、
 もっと 에스語に関心の
 ある人はいるだろうと
 思っていたのに・・・。
 ちょっとびっくりしまし
 た。エス語を自由に話せ
 るようになるには、家で
 もしっかり勉強してそれ
 なりに時間をかけなけれ
 ば無理、ということはお
 わかっています。そして今
 の私には他にやりたいこ

ともあって、時間を捻出できないことも。峰先生には申し訳ないと思
 いつつ、何の勉強もせずに学習会へ参加しています。というのも私にと
 って は語学の習得を目指す以前に、エスペラントの理念が大切であって、
 とにかく 에스語とつながりを持っていたいのです。それに他のメンバー
 の方々が、皆さんとても魅力的でお話が面白く、知らなかったことをい
 ろいろ教えてもらえてとても楽しいのです。

エス語は人工語といえ、“あつ、dankon はドイツ語の danke 似ている
 ナ”とか“harmoni は韓国語のハルモニと同じ音だな”とか、そういう
 発見も楽しいです。本当に良く出来た言葉だと思うし、今からでも共通
 語として英語ではなく、世界中で子供の頃から 에스語を学ぶようになったら、
 今よりずっといい世界になるだろうにと思います。

月一回の学習会を楽しみにしていますので、皆さん、これからもよろ
 しくお願いします。

【季刊誌】

ひとりから

対等なまなざしの世界をめざして



版画 岩田健三郎さん

私と9条

憲法施行60年

④

「憲法9条をどう思いま
すか?」。姫路市南町の山
陽姫路駅前で4月29日、市
民グループ「平和街角興行
舎」のメンバー4人が道行
く人に次々と声をかけた。
9条を「守る」「変え
る」「わからない」と書い
たホワイトボードに、シー
ルを張ってもらった。すぐ
下には9条の条文を掲示し
た。イラク戦争に反対して
外務省を退職した天木直人
・元レバノン大使らの呼び
かけに応じ、全国各地で展
開されている街頭投票の取
り組みだ。

平和街角興行舎

中村 雅子さん (41)



憲法9条改正の賛否を問うシール投票を実施し
中村雅子さん。ホワイトボードには9条を「守
る」に多くのシールが張られた。姫路市南町で

街頭投票で知る機会に

憲への危機感を覚えていた
時に雑誌で呼びかけを知
り、「9条について国民が
しっかりと意思表示をする絶
好の機会」と賛同した。

広島県大竹市出身。大学
時代の除き、広島で暮らし
てきた。「身近な親族に原
爆の犠牲者はいないが、広
島の平和教育で戦争の怖さ
は身にしてみているつもり」
でも、平和運動とは無縁だ
った。核実験に抗議し、広
島市の原爆死没者慰霊碑前

で座り込みをする人たちが
見ても「頑張ってくれてい
るから、私がすることはな
い」と感じていた。91年に
結婚後は専業主婦に。家事
や趣味のピアノ、バイオリ
ンに励んだ。

00年夏、中国新聞で連載
された「知られざるヒバク
シャ」という記事が転機と
なった。湾岸戦争で米英軍
が使用した劣化ウラン弾で
イラク国民らに放射線の被
害が出ていると告発する記
事だ。

事だ。「ヒロシマ・ナガサ
キと同様の苦しみが現代も
繰り返されていたなんて」
と強いショックを受けた。
夫(47)の仕事の都合で01
年4月、姫路へ転居。02年
10月にイラクの子を支援す
る団体「アラブの子どもと
なかよくする会」(東京)
のメンバーを招いて講演会
を開き、03年3月には広島
市であったイラク攻撃に反
対するピースウォークに参
加した。

でも、案通り
した人たちに
も関心を持つ
てもらわない
と中村さ
ん。全国各地の投票結果は
順次、インターネット(<http://kyujok.exblog.jp/>)
で公表されている。

「戦争は、法律や既成事
実を少しずつ積み重ねて始
まっていくもの。私自身が
そだったように、日々の
生活が忙しくても、立ち止
まって考えてみてほしい」
中村さんは今後も「平和を
求めて愚直に行動する人」
として街角に立ち続けるつ
もりだ。

Dum tri monatoj

9.13 '08 TADA Ryuuji

Mi estis mastrino dum tri monatoj. Mia edzino eniris en hospitalon. De tiam, mi estis fraŭlo. Tiam mi havis malmultajn feliĉojn, samtempe multajn maltrankvilojn.

Al mi ŝajnis, ke ŝi estis sana. Sed, ŝi havis sep aneŭrismo (arteri-tubereto=動脈瘤) en la cerbo. En Junio, oni operaciis ŝian maldekstran duonon en la cerbo. Ŝi restadis en hospitalo dum deksep tagoj. Poste, ŝi ripozis por havi sian fizikan forton. Ŝia korpo resaniĝis belege kaj rapide. Ankoraŭfoje, ŝi eniris en hospitalo por ricevi operacion dekstra duono en la cerbo. Ni povis vidi monitoron de mikroskopo, kiam ŝi ricevis operacion. Ni surpriziĝis pri lastatempa medicion.

Dum tri monatoj mi estis havi laborojn en la ĉiutaga mateno. Mi iris en la hospitalo ĉiutage kaj survoje iris por aĉeto. Mi povis fari nenion dum tri monatoj.

Ha! Ŝia naskiĝtago estas hodiaŭ.

Rememoro de mia patrino (2)

BABA Tokie

Tiam duonojaro pasis de post mia patrino mortis. Mi trovis ŝian taglibreton. Ŝi amis versi hajkon kaj tankon. Ŝi partoprenis de hajka rondo. Tiam ŝi de tempo al tempo gajnis premiojn kaj premi-monon. En tia okazo, ŝi ĉiam donis premi-monon laŭvice al siaj ok nepoj.

Por ŝi tio estis bona feliĉon kaj ĝojo. Tiam mi malfermis ŝian taglibreton, kaj trovis folion de ginko tie.

En taglibreto

Postlasita de l' panjo

Ginka folio

宮沢賢治とフィンランド

峰 芳隆

昨年8月に勉誠出版から出版された渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』に、エスペラントに関する2つの項目を執筆しました。

ひとつは、「第一部 作品篇」の「エスペラント詩稿」です。これは、賢治が書いたエスペラントの詩についての解説で、「執筆時期」「内容」「評価」「著作の背景」を約1200字（1ページ半）にまとめています。

もうひとつは、「第二部 一般項目篇」の「エスペラント」で、エスペラントがどんなものかということ、そしてエスペラントの学習など賢治とエスペラントの関係について書きました。長さは、ほぼ1ページです。

この大事典には、どうしたことか「イーハトーブ」の項がありません。執筆を依頼されれば、「イーハトーブはエスペラント語のユートピアである」などという間違った俗説を正す、良い機会だったのですが、残念です。

これまでの宮沢賢治の本では、エスペラントについてもエスペラントを知らない賢治の研究者が書いたものが多く、間違いが少なくなかったので、編者の渡部芳紀さんが勉誠出版の担当者に私を推薦したものと思われます。

きっかけは、1996年に私が編集して、大阪の吉川獎一さんが「リバーロイ双書」の2冊目として出した『宮沢賢治とエスペラント』です。

その本を読んだ渡部さんから声がかかって、1997年12月に神戸山手女子短大（現・神戸山手大学）で開かれた「賢治セミナー in 神戸」で「宮沢賢治とエスペラント」という話をしました。

その後、2000年には、月刊誌『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂）の2月号の「特集 宮沢賢治 謎の世界」に、「宮沢賢治におけるエスペラント」を寄稿しましたが、同じ号に渡部さんの「文学アルバム 宮沢賢治」が掲載されているので、これも渡部さんの推薦によるものと思われます。この時は、『イーハトーブ』の謎「学習時期の謎」「学習目的の謎」「作品への影響」「命名の謎」「ザメンホフの影響」という章だてで書きました（6ページ、約4500字）。この中では、もちろん、イーハトーブについての誤解も正しました。

このように、ひとつの本が出ると、そこからいろんなつながりが生れるようです。

もうひとつ、今年の7月に明石書店から出版された『フィンランドを知るための44章』という本の第4部「交流の歩みから」に、「第36章 ラムステット公

使とエスペラント仲間—エスペラント仲間が支えた日フィン親善」を寄稿しました。これは、1920年台に来日したフィンランドの外交官・ラムステットと日本のエスペランティストの交流がテーマです。

日本エスペラント学会の事務局に執筆者の紹介依頼があり、このテーマであれば、峰が書けるのではないかと推薦されました。私もラムステットについては、すでに調べていて、資料も手元にありましたので、引き受けました。というのは、ラムステットは当時の日本のエスペラント運動に大きな影響を与えた人であるだけでなく、宮沢賢治とも接点があったからです。

1926年、東京へ出てきてエスペラントの学習に取り組んでいた賢治は、たまたまラムステットの講演会に出て、ラムステットに質問しました。残されている賢治の手紙には、彼の質問に答えて、ラムステットが「やっぱり著述はエスペラントによるのが一番です」と述べたと、書かれていますので、そのようなエピソードも書いておきました。

(蛇足：明石書店は、マグサイサイ賞受賞を受賞した創業者の石井昭男社長が兵庫県明石市の出身ということで命名したものである、と先日の朝日新聞の「ひと」欄に書かれてありました)。



宮沢賢治のすべてを知る 決定版大事典

詩・童話などの作品はもちろん、関連人物・音楽・美術・歴史・動物・植物・地名など、関連する700項目以上を収録



活動アルバムから

El nia albumo

昨年(2007年)4月26日のイーグレひめじの学習会をブラジルのイルデッチ・バルボーザ・アキノ(Ildete Barbosa Aquino)さんが来訪した時の写真です。イルデッチさんは、ブラジルのBona Esperoから大本に招待されて約半年間滞在して、各地を訪問して交流を重ねました。この時は、大本はりま本苑に来訪して、高砂市の塩谷誠さんと恭子さん夫妻宅に滞在していました(塩谷さん宅は、以前Pasporta Servoに登録していたようで、現在も外国からの来訪者が多いそうです)。

Bona Esperoは、ブラジルの家庭的に恵まれない子供のための共同体で、学校もあります。創設して運営しているのはエスペランチストで、エスペラントが教えられています。現在、中心になっているのは、イタリアとドイツ出身のエスペランチストの夫婦です。イルデッチさんは、卒業したら大学で学んで、Bona Esperoの先生になるのだと言っていました。最近、このBona Esperoを紹介した"Bona Espero - idealo kaj realo"という本が出ました。著者はポーランドの人、出版したのはスロバキアと、文字どおり国際的な本です(La Movado10月号の広告参照)。

(Mine Y.)

写真①説明：前列左から、坂本、小西、イルデッチ、久保田、後列は、塩谷恭子、塩谷栄子、吉田、大前、竹田、青木(敬称略)。



写真②説明：竹田さんの指導で折り紙に挑戦中の Ildete さん。



稲美町で野田淳子のトークコンサート

La Movado10月号のp10で紹介されているフォーク歌手・野田淳子のホームページの「野田淳子 2008年コンサートスケジュール」を見たところ、12月6日(土)午後1時30分から、稲美町文化会館コスモホール(兵庫県加古郡)の「トークコンサート」に出演予定とあります。無料だそうで、問い合わせ先は、「教育委員会 0794-92-1212」とあります。

私は、野田さんのCDを聞いてからすっかりファンになり、一度生演奏を聞きたいと思っていました。しかし、この日はあいにく、関西エスペラント連盟の執行委員会があり、残念ですが行けません。

(Mine Y.)

9月の酒

曲田 忠房

本格的な秋の訪れを告げるかのように、新潟の親戚から食用菊が送られてきた。

今年の秋もまた菊を肴にして晩酌ができるかと思うとうれしくなってしまう。新潟から福島、山形にかけては、菊の花をおしたしや酢の物にして食べる習慣があり、秋になるとたいていの家で料理の一品として食卓に上がる。食用菊には、食べたらず以外とうまいので「おもいのほか」とか、菊を食うなどとは恐れ多いことで「もってのほか」といった名が付けられている。食用菊といっても花はきれいだし、この地方の人達は観賞し、そして味わい、二度楽しんでる。

その菊の節句・重陽は、新暦で9月9日だが、菊はまだ咲いていない。旧暦では10月7日になる。

菊の節句は、周の時代に幽山に流された従童が菊のしずくを飲んで不老不死を得たとの故事に、中国では縁起の良い九の数字を重ね合わせて五節句の一つになった。日本に伝わると、平安時代には宮中で「重陽の宴」として年中行事となり、貴族たちは盃に菊の花びらをうかべて観菊の宴を催した。これは女御・女房をはべらせての雅なものだったのだろう。しかし、時代も経てこの節句が大衆の中に広まっていくと内容はだいぶ違ったものになる。

上田秋成の雨月物語の中に「菊花の約」という一遍がある。出雲の武士である赤穴宗右衛門と、加古川の住人丈部左門の、男と男の友情と信義を描いた物語だが、平安時代の加古川は日本最大の宿駅だったそうだから、加古川にも多くの好漢（いい男）たちが住んでいたのだろう。

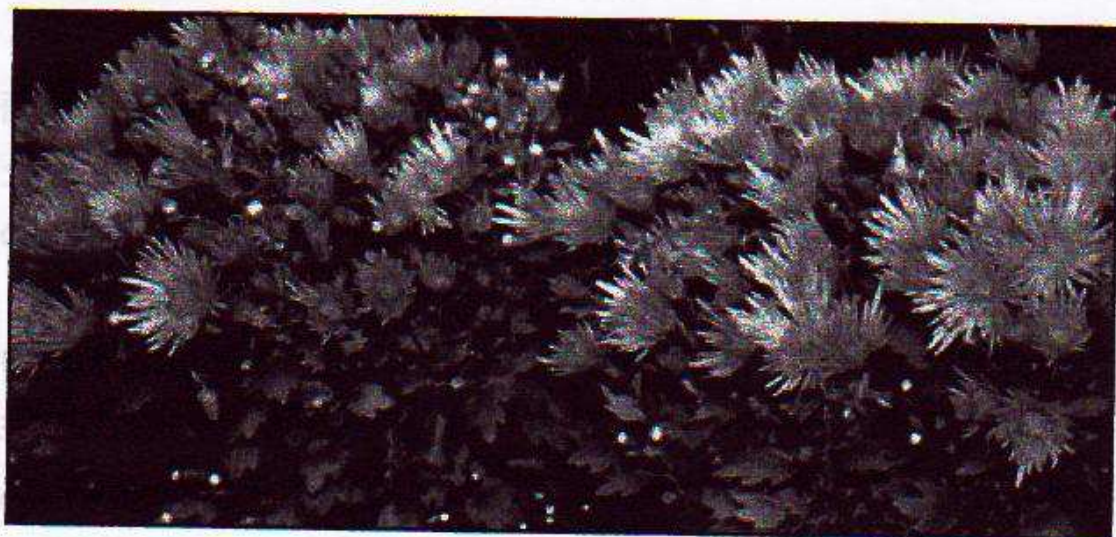
物語の内容は主家の命で滋賀に旅した赤穴は、帰りに加古川の宿で熱病の罹り倒れてしまう。宿の物置に寝かされているところを左門に助けられ、左門の家で手厚い看病を受ける。やがて回復した赤穴は、左門と話すうちにお互いに意気投合して義兄弟の契りを結ぶが、赤穴は出雲へ帰らなければならない。赤穴が帰る日に左門は、来年の重陽の日はず酒を用意して待っているから戻ってくるようにという。二人は再会を約

して別れる。その日を待ちに待っていた左門は、朝から菊の花を飾り、うま酒を買い肴を用意して待つが、夕方になっても現れない、信にあつい赤穴のことだから必ず来るだろうと薄暗くなった外に出てみると、赤穴が影のように近づいてくる。赤穴は言う、出雲に帰ったら主家は滅び私は囚われの身になり、牢から出ることができなくなってしまった。亡霊になれば一日千里を行くことが出来るというので約束を果たすために命を絶って会いに来た。と言って薄闇の中に消えて行く。

上田秋成は男色のエロチシズムを妖しげに描いているらしいのだが、私にはあまり理解できない。理解できたのは、重陽の酒は男同士で飲むものだというくらいのことである。

それにしても現代はおかしなというか便利な世の中である。生きたまま亡霊になれば（飛行機に乗れば）一日で千里を飛ぶことができるし、ヤクザな幻（言）妖は世界中を飛び交っている。亡霊にならなくても、普通電車に乗れば東京まで10時間ほどで行くことが出来るのだから重陽の節句の約などすることもない、年に何回でも旧友と会って酒を酌み交わすことができるのである。

今回も酒の話しなってしまったが、私にはこんな話題しかないのかもしれない。



花も美しい「もってのほか」

ETAJ DEMANDOJ

加古川 坂本敏明

はりまエスペラント会会員の皆さん 今日！ 皆さんもお忙しい中でもそれなりにエスペラントに携わり努力されておられることとされます。がんばりましょう。私も一念発起で数ヶ月前から“La Movado”の作文教室に挑戦して勉強させてもらっています。なかなか腕は上がりませんが、それゆえ多くの得るものがあり重宝しています。

さて、そうしているうちに、この作文教室から私にある疑問が生じてきました。それは以下の通りです。(Bonvolu bonajn konsilojn al mi.)

課題：受付は3階にあります。

これにたいして、**La akceptejo troviĝas en la dua etaĝo.** で解答したのですが、**dua** で引っかかりました。(日本大会などの会場で張り紙を用意しているつもりで・・・の条件付で、正解は **dua** → **tria**) この **dua** か **tria** かというところで私に疑問が生じました。(担当者の方は最初 **dua, tria** どちらも正解とされていたそうですが、日本大会など・・・ということで **tria** のみ採用となったとのこと)

疑問①：エスペラントや他の言語を勉強することは、単にその言語を知るのみならず、それに関連する文化、習慣等も知り、理解し、またその言葉を尊重するもので、むやみに自分に都合よいようにや、自国の習慣に変更したりするものではないのでは？

例えば、日本では複数物であってもあえて複数形で表示しない習慣的な状態がありますが、英語その他エスペラントでは複数物は複数形が要求されます。これと同様に、**etaĝo** も欧州諸国では一階は **teretaĝo**、二階は **unua etaĝo**、三階は **dua etaĝo** だと推定されます。日本国内のエス大会だからと言って三階を日本流に **tria etaĝo** と表現するのは、日本、米国、中国、韓国などを除く他の国の世界に混乱を招くことなので

は？むしろ作文教室やミニ講習会で理解させる必要があるのでは？

これとは反対に英語の観点から複数形を必要と思われる単語が単数形でなければならないものもエスペラントにあるようです。

例： **pantaloon, kalsono, ktp.**

疑問②： **dua** を不正解とすることで「3階」という単語に“**dua etaĝo**”という単語を使用してはいけないのか？ ヨーロッパ諸国の人との交流でも **tria etaĝo** と言うのか？

疑問③：日本、米国、中国、韓国の大会開催ではヨーロッパ人は参加しないのか？ 参加されたヨーロッパの人は混乱するのでは？ もっともいろいろな方策はあるだろうけど。

疑問④： **dua** を不正解とされた人が、あくまでも **tria** が正解であって **dua etaĝo** という言い方はありえないものと理解してしまわないか？

以上、少々を列記しましたが、私自身はあくまでも **dua** に固執するものです。 **dua** を不正解とすることに立腹しているのではなくて、この件については安易に日本流に訳して本当に問題ない内容なのか問題提起します。



Kio mi estas ?

Sakamoto

① Mia korpo estas maldika kaj longa, krome mi havas gliteman aŭ galuecan haŭton.

Mi loĝas en la akvo de lagoj, lagoj kaj riveroj.

En somero oni ŝatas manĝi min. Tial en ĉi-jara somero iuj kelkaj komercistoj okazigis la kamuflon pri la naskloko.

Kaj tio fariĝas la granda problemo.

Mia korpa formo similas al serpento.

Kubota

② Oni komprenas mankon de sia vidkapablo per mi. Iuj uzas min por ornamo sian vizaĝon.

③ Vi devas danki min ĉiutage, ĉar kank' al mi vi povas manĝi bongustaĵon, trinki bienon kaj teon, kaj interproli amon kun la alia.

Nanba

④ Akvo estas necesa por floro. Amo estas necesa por homo.

Mi estas necesa por vivo. Volo por vivi naskiĝis de mi al morgaŭo.

Ni vivu pli bone kun mi. Ĉar ni estas esperantistoj.

前回の答え

- ① pomo ② dentobroso ③ ranido ④ 29a de februaro
⑤ akvomelono ⑥ glaso aŭ botelo

高砂南高校エスペラント部？

峰 芳隆

最近、関西エスペラント連盟の事務所で、古い購読者カードの整理をしていると、その中に、「高砂南高校エスペラント部」というのがありました。1990年6月から91年6月までの2年間ですが、購読した記録があります。

また、かつて加古川市平岡町新在家にあった兵庫女子短期大学（現在の兵庫大学短期大学部？）図書館が購読していたことを示すカードもありました。その購読期間は、94年3月から97年3月です。

私はこれらのことを知りませんでした。しかし、これは、その頃、上記の2つの学校にエスペランティストの先生が居られたらしいという証しになると思います。

ところが、私は、この頃は勤め先の仕事で東京への出張が多くて、姫路エスペラント会も開店休業状態で、関西連盟の仕事にはほとんど関わっていませんので、このことを知りませんでした。

当時の事務局長はサカモト・ショージさんで、見つかったカードの筆跡はサカモトさんのものです。しかし、サカモトさんは1996年5月に亡くなっていますので、残念ながらお聞きすることができません。

これについて、どなたか、ご存知ではないでしょうか。

風月

2007年(平成19年)9月7日

金曜日

福祉作業所支援員

馬場 祝栄

ました。

(兵庫県加古川市 62歳)
エスペラント語の勉強を始めて5年。ほとんどの人に、「エスペラントって何？」と聞かれます。「今でもまだあったの？」

私は、この機会に合わせて日本旅行を楽しまれた方たちの案内役のお手伝いをしました。姫路城の見学に訪れた一行はフランス人、ドイツ人、カナダに住む中国人、米・ニューヨーク市に住む若い日本人女性……と、地域も世代もさまざまな人たちでした。

英語を習った方が役に立つのでは」と、不思議な顔をされたこともあります。

エスペラント
学ばませんか

誰もがエスペラント語だけで楽しそう

は、言葉や民族の違いを超えた世界共通語として作られました。世界に100万人のエスペランティストがいるといわれます。世界大会も毎年開かれ、第92回世界エスペラント大会は8月、横浜市で開催され

に話している様子を見て、感動しました。まだ未熟な私ですが、辞書を片手になんとか会話の輪に加わることができました。みなさんもエスペラントを学んでみませんか。

学習例会の記録と予定

Kiam, kie, kiuj kune ni lernis kaj lernos?

実績 (出席者)

<加古川：加古川総合文化センター>

7月20日：馬場，南場，竹田，曲田，松田，峰

8月24日：坂本，馬場，南場，竹田，峰

9月21日：坂本，馬場，南場，竹田，多田，曲田，峰

<姫路：イーグレひめじの国際交流センター>

7月24日：小西美，小西成，大前，中村，久保田，竹田，吉田，青木，峰

8月28日：小西美，小西成，大前，中村，久保田，竹田，峰

9月25日：小西美，小西成，大前，中村，久保田，竹田，木根，峰

今後の予定

★ 姫路 (いずれも第4木曜日，午後2時～4時)

10月23日：大本はりま本苑 (イーグレが使えないため)

11月27日：イーグレひめじの国際交流センター第4会議室

★ 加古川 (いずれも第3日曜日，午後2時～4時)

10月19日：加古川総合文化センター会議室3

11月16日：加古川総合文化センター会議室3

★ 12月は姫路市内でザメンホフ祭を開催したいと思います。

12月13日(土)と21日(日)午後が候補日です。それとも11月下旬(29日か30日)の方がいいでしょうか。また、会場には、楽器を使って歌の歌える場所を探していますのでご紹介ください。

(Mine Y.)

編集ノート

* 曲田さんから「6月の酒」につづいて「9月の酒」、次回「正月の酒」?も期待しています。なお、「Revue Orienta」5月号(2008)にエス訳「Promeso je krizantempofloro」が載っています。

* 次回の原稿は1月7日までをお願いします。

★★

“Verda Placo” (みどりのひろば) n-ro 3 2008年10月10日

発行： はりまエスペラント会 代表 峰 芳隆 高砂市北浜北脇 29-16

編集： 南場 敏郎 加古川市平岡町山の上 684-33 13A-102

nanba.tosiro@w8.dion.ne.jp

エスペラント



Verda Placo

vintro 2009

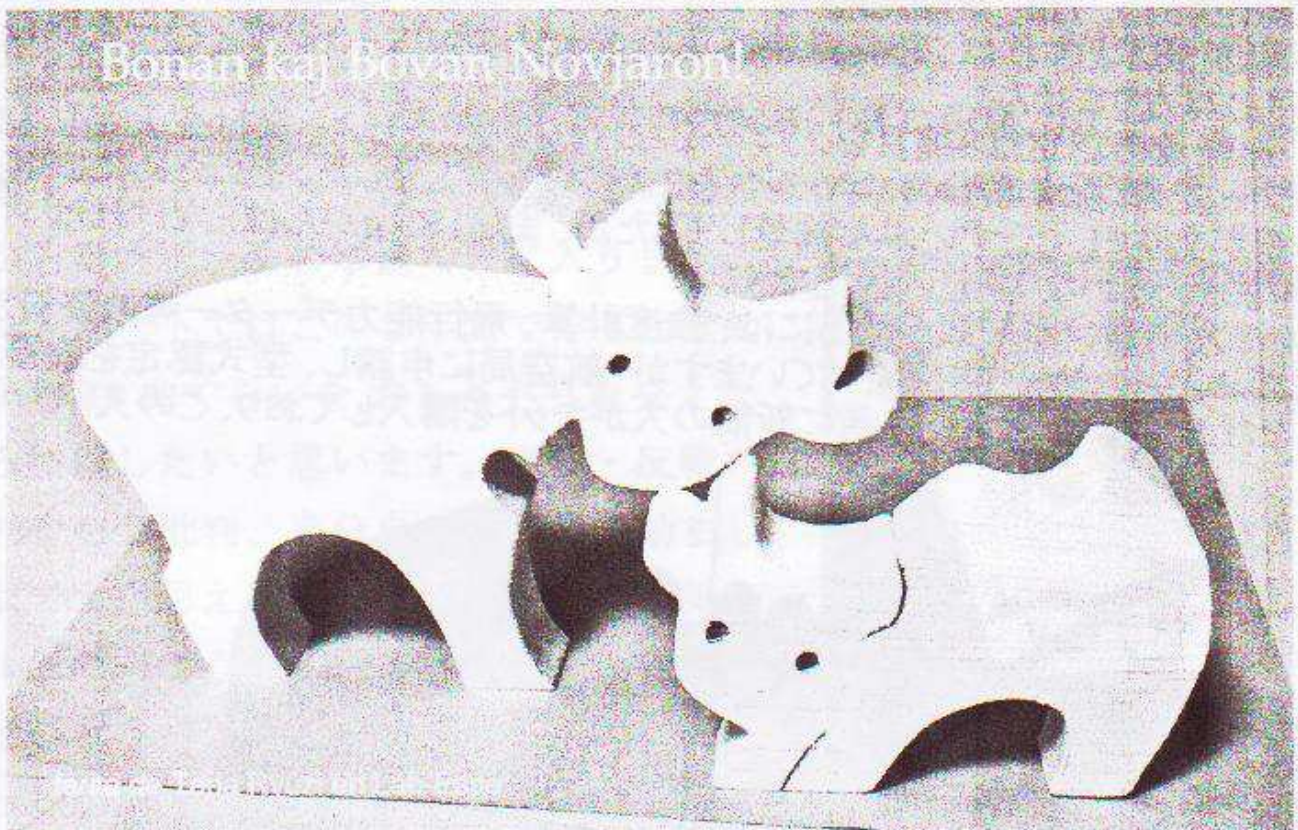
みどりのひろば

2009年 冬

N-ro 4

Harima Esperanto - Societo (はりまエスペラント会)

Bonani kaj Bovani Novjaron!



先日は皆様に来ていただいてありがとうございました。
ザメンホフ祭とやらで、大勢の人と一緒に写真など撮ったのは初めてです。
むかしの美男美女に囲まれて感激しました。

申し遅れました、私の名はエスペーロ(ESPERO)と申します。
自作機で本名はMINI-MAXと言い、米国のホームビルドではベストセラーの
ロングセラーの機体です。

私の主人は 14年前にばらばらの木片と金属の板とボルトとナット類から
作り上げてくれました。約6ヶ月を要しました。会社に勤めながら、土日を
利用してすこしづつ、大事に作ってくれました。私は3代目で、初代はほぼ
完成まじかな機体を完成させ、塗装して送り出しました。

2代目は私を発注したときにはいい材料がなく、米国で整い、検査し
入荷するまでに、勉強と手習いのために組み立てたそうです。
金属性の二人乗りのでっかい機体でした。作業はリベット打ちが主。
納期は8ヶ月の予定が一年半もかかりました。

主人の友達も手伝ったそうです。後から聞くと、機体と使ったリベットの
重さよりも行程にて費やした缶ビールの目方の方がずーとすごかったそう。
北海道納品予定が遅れたために、キャンセルとなり、やっとう和島に嫁ぎ、
テスト飛行も何とか無事に終わりました。

さて 私のことですが、身長4.72m 横幅7.62m 翼面積10.45㎡
離陸距離45.7m 着陸距離54.9m パワー52HP 速さ98Km-40Km/h
私が飛ぶとすれば、超軽量機認定許可を受けるか、JAのナンバーを取得し
なければなりません。

超軽量機認定は8項目をクリアしなければなりません。実は主人が私の
パワーアップをするためにエンジンを2クラスアップしました。そのために28Kg
体重が太りました。ずいぶん減量しましたが、まだ18Kgがんばらなければ
なりません。かなり厳しい状況です。

一方JAナンバー取得するには、強度計算、飛行能力データ等の資料が
必要になります。一応は整っていますが 航空局に申請し、型式認定を取得
しなければなりません。以前に新潟の人がキットを購入しており、この人が



型式認定を受けてくれば、私は登録のみでいいのですが。型式認定を受けるためには、膨大な費用と時間が必要になります。航空局との折衝が大変となります。

次には飛ばす場所です。購入時は結構飛行可能な場所がありました。また、自作機協会のメンバーもたくさんいました。

事故がおきるたびに締め出され、騒音と安全面でなかなか許可がありません。

飛行エリアもかなり条件付で厳しいです。航空法の但し書き部分の適応で運用しているために、都度申請の試験飛行扱いとなります。

出来ないことばかりを言っても仕方ありません。

今、私を水上機仕様にするように考えています。陸上だと車輪は重量に含まれますが、フロート(水上機の足の船の部分)は自重外ですので、かなりの減量になります。

超軽量機認定を受けて、私設の飛行場を借りるか海上で、飛行テストをすることを夢見ています。

またのお越しをお待ちしています。

まあの la unua koncerto

中村 雅子

12月15日のザメンホフ祭では、自作の歌を聴いていただきありがとうございました。途中ウクレレのコードを忘れて手が止まり、お聴き苦しかったことをお詫びします。しかし、こんな失敗にもめげず、『まあの la unua koncerto』を2009年4月19日(日)午後、イーグレ姫路の地下アートホールで行います。このお正月休みに詳細を決めて、年明けから案内チラシの準備などに入ります。

コンサートではこの2年間で作った歌の中から10曲ぐらいを、おしゃべりを交えながら披露したいと思います。平和・反戦の想いや社会批判、自分自身の迷いや励ましの歌です。思えば2年前、友人宅で何気なく『風の向こう』を口ずさんだところ、「ぜひ歌うべきよ」と励まされ、実際作ったからには誰かに聴いて貰いたい、届けたいと思うようになりました。

今までの区切り、そしてこれからのスタートになるようなコンサートにしたいです。エスペラント会の皆さん、ぜひ聴きにきてください。



風の向こう

by Masako N.

前奏 D x2 Asus4 x2 D x2 Asus4 | A A7 |



1. あのひのこを おぼえて いまもか
 こまで あまれば にじーり つくのか
 2. すすき ませば まこえて きまもか



やわらのひかぜ かれもを はかして
 かわのほじまり あまのうま くるはら
 こだらかゆれて とりにちほ うにうの



まのうの ように まぶたに うかぶわ
 はかぬる くもに たすねて みよう
 つばさ ひろげて かせにの ったはら



あはれの えかお あおいそら D x2
 しずかほせを かんじはら D x2 D x2
 たかくつよーく まいあかぬ D x2 D x2



1. ほげしい はかぬに あらわて
 2. ふさあはる かせに とぼすて



つかれたからだを ださしめゆ
 つかれたこころを とりもてゆ



わたし ほ め ぎ り ひ と り に ぽ っ て も

わたし ほ め ぎ り ひ と り に な っ て も



か ぜ の む こ う の そ ら の し た D x 2 A sus 4 | A A 7 |

か ぜ の む こ う の そ ら の し た D D

後奏 D x 2 A sus 4 x 2 G A D D

の 風 向 ころ

1.

あの日のことを覚えていますか
柔らかな風 川面を流れて
昨日のようにまぶたに浮かぶわ
あなたの笑顔 青い空
どこまで歩けばたどり着くのか
川の始まり水の生まれる場所
流れる雲に尋ねてみよう
静かな時を感じながら
激しい流れに抗って
疲れた体を抱きしめよう
私は目指すひとりになっても
風の向ころの空の下

2.

耳を澄ませば聞こえてきますか
木立が揺れて 鳥たちは歌うの
翼広げて風に乗ったなら
高く強く 舞い上がれ
吹き荒れる風に飛ばされて
ちぎれた心を取り戻そう
私は目指すひとりになっても
風の向ころの空の下
私は目指すひとりになっても
風の向ころの空の下

3階問題を再び問う (Verda Placo N-ro 3 参照)

前号で“La Movado”の作文教室での課題文で、「3階」という日本語の対訳エス語として“dua etaĝo”で回答したところ、この dua が減点対象になったことから、私なりの理解、解釈との相違で納得いかないものが生じ、“Verda placo”に書かせてもらいました。更なる理解のために“La Movado”の作文教室担当者の方に直接文書で質問しました。結果、丁寧なる返事を戴きました。会員の皆さんにもいくばくかの参考になるのではと思い、担当者からの回答内容を以下に掲載します。

日本語の「3階」を la dua etaĝo とするか la tria etaĝo とするかについてですが、「エスペラントとしてはこちらが正しい」という選択はもともと不可能と思います。これは、「田中花子」をエスペラントで言うとき Tanaka Hanako と Hanako Tanaka のどちらが正しいか、という問題と似ています。姓名順、名姓順のどちらにもそれぞれ根拠がありますが、エスペラントとしてどちらが正しいかの選択はできません。

特定の国や地域の文化と直接結びついていない、というのは、国際語としてのエスペラントの特長のひとつです。

日本語で言う「3階」がエスペラントの文書ではどう書かれるか、シミュレーションしてみます。

(1) 各国のエスペランティストが集まる、世界大会のような場所での会場案内

たとえばイタリアで行なわれる世界大会なら la dua etaĝo あるいは la etaĝo du となり、アメリカや韓国での世界大会なら la tria etaĝo あるいは la etaĝo tri となります。

なお、横浜での世界大会の大会冊子に書かれている会場説明の階表示は日本式でした。受付の場所は5階で、冊子には la 5-a etaĝo と書かれていました。この冊子の発行者は世界エスペラント協会ですから、最初の原稿を書いたのは日本人かもしれませんが、協会の大会担当者のチェックが入っていると思われます。

(2) 同国人を中心に集まる、全国大会や地方大会、ザメンホフ祭

これも(1)と同様、その地域での呼び方になります。

(3) 日本人が自宅にヨーロッパの人を招く場合

相手が「日本で言う3階を la dua etaĝo と表現する国から来た人」であるところらが知っている場合は、相手の習慣に合わせて「3階」を la dua etaĝo と言ってあげるのもひとつのやり方です。

でもわたしならば、「3階へあがってください」と言いたいとき、Venu al la etaĝo tri と言っておいて、ヨーロッパでいう2階は日本では3階になるのだという説明を加えます。そういうやりとりが、国際交流の楽しさだと思うからです。

どちらが相手にとって親切かは、ケースバイケースでしょう。

(4) 日本人がヨーロッパの文通相手に「わたしは3階に住んでいます」と書く場合

(3)と同じです。Mi loĝas en la dua etaĝo と書くのもいいですし、Mi loĝas en la tria etaĝo と書いて、日本でいう la tria etaĝo はあなたの国で言う2階にあたるのだ、と説明するのも楽しいと思います。

以上のように、la dua etaĝo か la tria etaĝo かは、どちらもまちがっていないし、一方がエスペラントの原則で他方が特例というわけではない、というのがわたしの考えです。

したがって、辞書の例文もまちがいでありません。一般に辞書の例文というのは、一定の文脈のもとでの正しい言い方を示すもので、その例文以外の言い方を否定するものではないからです。これはエスペラントに限らないと思います。

また、la etaĝo tri は「3という名前がついている階」という表現ですが、マンションやホテルのように階表示があっても、個人の家のように表示がなくても、“la etaĝo nomata ‘tri’ ” の意味で使えると思います。階表示のない建物であっても、その階が「3階」と呼ばれていることにまちがいはないわけですから。表札があってもなくても田中家が familio Tanaka であるのと同じです。

どちらが主でもなく従でもない、という考えのもとに、10月号の作文では両方を正解にしようと最初は思っていました。しかし、「日本大会などのイベントで貼り紙をつくっている」という条件をつけているので、la etaĝo tri または la tria etaĝo を正解としました。「実用作文」ですので、実際にエスペラントで話したり書いたりする場面かどうかの正しさを考えながら、毎月の原稿を書いています。

坂本様に添削文を返送させていただいた時には、まだ両方を正解にしようと考えている段階でしたので、Bone と書いたのです。

首尾一貫しない態度をとったことをお詫びいたします。

今後も、ご意見がありましたらご遠慮なくお手紙をくださいませ。

Nia Zamenhofa Festo en Lab-Espo

(Raportas Mine-Y)

2008年のはりまエスペラント会のザメンホフ祭は12月13日11時から、稲美町にある多田竜二さんのLabo-Espoで開催されました。参加者は稲田正昭、大前知子、坂本敏明、佐野邦夫、竹田華恵、多田竜二、中村雅子、南場敏郎、藤井富朗、曲田忠房、松田邦子、吉田信子、峰多鶴子、峰芳隆の14人。



Partoprenantoj

S-ro Tada ĉe la enirejo de La-Espo

最寄りのJR土山駅からでもかなり離れているので、車に乗り合わせて集まりました。その中でも曲田さんは愛用の自転車でした。

3階建てのLabo-Espoの入口に
★ Bonvenon! とありました。中にも、Kunvenejo, Necesejo など、エスペラントで案内が表示されています。会場は3階ですが、1階には多田



さん自慢の一人載りの飛行機 (Verda Placo N-ro1, p7 参照) が置いてあ

ります。ふだんは翼をはずしてあるそうですが、この日のために完全な形に復元され、その雄姿を見ることができました。2階には、多田さんが毎年エトの動物組み木細工を作る木工機械などが置いてあります。屋上は太陽光パネルの「多田発電所」です。

全員が揃うまでの待ち時間に、持参した2007年の世界大会からの活動の写真をパソコンのプロジェクターで投影しました。スクリーンと窓の遮蔽板なども多田さんの手作りでした。

ザメンホフ祭の前にサプライズがありました。多田さんから、スクリーンの上に立って、上からの紐を引くように言われました。恐る恐る引くと、もっと強くとの注文。思い切って引くと、何と「くす球」が割れて、中から「小坂賞 受賞おめでとうございます」。さらに、花束と大前さん手作りの大きなケーキをいただきました。私の大好物のチーズケーキには、"Ni gratulas êe via premiigo"と書かれていました。Koran dankon pro via gratulo!

Framaĝo kuko

bakita de s-rino Oomae

続いて、参加者全員が自己紹介。それぞれにユニークな話を聞かせていただきました。なかでも今回初めての参加の藤井さんは姫路エスペラント会の頃からの会員ですが、新しい会員とは初顔合わせでした。

食事は、多田さんが奥さんと前日から準備したオデンと焼き鳥 (Multan dankon ankaŭ al lia edzino!). それ以外にもチーズの自家製燻製などのご馳走でした。また、曲田さんから持参した新潟の地酒の、吉田さんからは和菓子と抹茶のふるまいがありました。

食後は、中村雅子さんが自作の歌「風の向こう」をウクレレの弾きながら歌い、竹田華恵さんがヴィオリラの弓弾きで「平城山」とピック弾きで「明治一代女」を演奏。「きよしこの夜」のエスペラント版"Paca nokt"を竹田さんの伴奏で歌い、食後の体操にと峰多鶴子さんのリードで、この歌(ハワイ語でポーライエ)のフラダンスの手の振りを全員で。竹田さんからは、竹で作った「阿弥陀さんば」の紹介(「うさぎとかめ」



と「夕焼小焼」) もありました。

また, Kantaro "Floris violetoj" から, "La Espero" と "La Taĝiĝo" の練習もありました。

本が景品の福引きは, 室内に設置されているダーツで決めました。その他にも KLEG から持参した本を販売。

そのあと, 藤井さんが研究成果の「国際語思想史」をプロジェクターを使って講演。これは, 12月20日の神戸のザメンホフ祭でも行われたそうです。

最後に, もう一度全員で "La Taĝiĝo" を歌って, 4時前に閉会しました。多田さんからは, おみやげとして全員が組み木細工の「丑」をいただきました (Denove elkoran dankon al li!)

後日, 多田さんからは, 次のメッセージが届きました。「先日は皆様に来ていただいて, 十分なことも出来ずにあれも, コレもと反省しきりです。(中略) 皆さんがよければ, 春にでもメニューを変えて集まりたいですね」。

また, 多田さんからは, 当日撮影したビデオの DVD を預りましたので, 希望者に回覧したいと思います。この Raporto も一部はその DVD で確認しましたが, 5時間におよぶ内容を全部は思い出すことができません。もれや間違いがあると思いますが, ご容赦ください。

Rememoro de mia patrino (3)

BABA Tokie

Ĉiutage mi iras promeni kun hundo. Survoje florigardeno estas. Kiam majo venas, ĉiam tie centaŭreoj floras. Kiam mi vidas tion, mi rememoras ion kaj patrino. やぐり草

Tio estas, kiam mi estis lernejanino. Tiutage instruisto vizitis hejmon de siaj lernantoj. Mi revenis al hejmo kaj malfermis ŝovpordon. Tiam mi vidis plenajn florojn en florujo sur getaujo. Mi pensis tion tre bela kaj estis feliĉa. Tiam mi eksciis nomon de floro, "centaŭreo".

Patrino sciis nomojn de murtaj floroj. Sed ŝi ne sciis, ke miozato estas reala floro. Ŝi diris, “miozato estas floro en kanto”. Kiam mi revenis al gepatradomo, mi donacis al ŝi miozatojn, kiuj floris en mia ĝardeno. Ŝi amas kanton, “Miozaton al vi”

Mi rememoras

“La miozaton al vi”,

kune patrino

わかれ草

110

Gastoj el Francio kaj Italio

★ Du Miŝeloj el Francio

11月10日の夜遅く、藤井富朗さんからメールが届きました。今、自宅に来ている二人のフランスのエスペランチストを連れて、明朝、姫路に行くので、姫路城を案内してほしい、という内容でした。藤井さんからは、そのしばらく前に、フランスのエスペランチストが神戸に来るので姫路城を案内したいと聞いていましたが、具体的な日時は二人が来てからでないといけないとのことでした。夜中の急な話でしたが、幸い11日（火曜日）はKLEG事務所に行く日でなく、ほかにも予定が無かったので、藤井さんに電話して承諾を伝えました。しかし、他の会員には、連絡する時間はありませんでした。

11日の朝、姫路城で待ち合わせました。藤井さんと一緒に来たのは、Michelle Paumierさんと Michèle Langeoisさん。どちらもミシェルさんです。お城の前では、ちょうど菊花展が開かれていて、Michèleはダンナが盆栽愛好家とのことで、ダンナのために熱心に写真を撮り、盆栽菊の苗まで購入していました。どうして持って帰るのか、防疫のことなども心配しましたが。菊の盆栽というのは、私には初めて見でしたが、外国でも流行っているそうです。

藤井さんは、今から40年前、姫路工大にあったエスペラント研究会の会員で、1968年に第16回関西エスペラント大会が姫路工大で開催した時には会場を借ることなどの活動をされました。卒業後は金沢大学大

学院に学び、その後は神戸高専の教授を務められました。しかし、その間も、ずっと姫路エスペラント会の会員で、今もはりまエスペラント会の会員です。現在は、神戸市西区のお住まいに近い神戸エスペラント会

★ *Nino kaj lia familio el Italio*

でも活動されています。

イタリアのエスペランチスト Nino Vessella さんが家族 (edzino, filo kaj filino) と一緒に来日して、旅行の途中に姫路城見物を希望していると、東京の菊島和子さんから連絡が入りました。filino の Silvia さんが京都の立命館大学で日本語と日本文化を学ぶために留学中で、この機会にということです。

4人は、12月26日11時前、京都から姫路に着きました。姫路の後は岡山へ向かうということで、岡山エスペラント会の原田英樹さんも来られました。原田さんは、姫路医師会メディカルセンター勤務のお医者さんです。

4人のうち、エスペラントを話すのは Nino さんだけということでしたが、edzino の Silviana さんもいくらかできる方でした。Silvia さんは日本語を学習中ということで、専ら日本語で話しをしました。filo の Karlo さんは、古代ギリシア語とラテン語の研究者ということ物静かな青年ですが、カタコトのエスペラントで少し話しをしました。

私の姫路城案内のコースは、いつも、まず「イーグレひめじ」の4階に行って、そこからの雄大なパノラマを見てもらいます。その後、西の丸の百間廊下を通り、そのあと天守閣に登ります。しかし、Nino さん一家の時は、年末の寒い日でしたから、西の丸の百間廊下を省いて天守閣だけにしました。それでもゆっくりと見学しましたので、2時間は掛かりました。さすが年末なので、観光客は少なく、いつもの混雑はありませんでした。

なお、Nino Vessella さんは、東アフリカ地方の部族共通言語のスワヒリ語の専門家で、次の2冊の本をいただきました。興味のある方にはお貸ししますので、どうぞ。

- ・ *Skizo de Sūahila metriko*
- ・ *Kompara analizo de la sūahila kaj Esperanto*

(峰 芳隆)



gastoj-1 : 二人のミシェルと藤井富朗さん



gastoj-2 : Nino さん一家と原田英樹さん

Pri Ossaka-Premio

峰芳隆

小坂賞 (Ossaka-Premio) を 10 月に和歌山で開かれた日本エスペラント大会で受賞しました。この賞は、財団法人日本エスペラント学会 (Japana Esperanto-Instituto : JEI) が創立者・小坂狷二 (おさか・けんじ : Ossaka Kenji : 1888-1969) の業績を記念して授与しているものです。その際に次の謝辞を述べました。

Mia unua danko iru al la estraro de JEI, kiu honoris min per la premio.

Mi tutkore dankas al vi ĉiuj, kiuj donis al mi okazon kaj lokon labori en Esperantio, ĉar sen via subteno kaj kunlaboro mi certe ne povis daŭrigi la laboradon.

Profitante la okazon, mi ankaŭ dankas al mia familio, kiu ĉiam komprenas kaj subtenas mian strebadon en la movado. Koran kaj multan dankon.

次は、JEI の機関誌 “La Revuo Orienta” 12 月号に掲載された受賞の弁です。

恵まれた環境の中で

私の仕事をこのような形で評価していただき感謝します。1979 年に、批判活動がないところには進歩や発展はないと、La Kritikanto という生意気な出版社を作りましたが、いまは亡き宮本正男の著作など 3 冊を出したところで挫折しました。その後、エスペラント版のエロシェンコ著作集 6 冊を編集して、関西エスペラント連盟 (KLEG) の出版部門である日本エスペラント図書刊行会に出していただきました。1993 年から 99 年までのあしかけ 7 年間編集した季刊誌 “Riveroj” は、吉川獎一さんのリバーロイ社が発行してくれました。リバーロイ社には、私が編集した『宮沢賢治とエスペラント』など 4 冊も出版してもらいました。96 年からは KLEG の図書部長として、毎年 1 冊の本を出すことを目標に、学習と文化の向上のために役立つ本作りをしてきました。そのようにして出

版したタニヒロユキさんや藤本達生さんの本は、幸い好評をいただきました。現在担当している“La Movado”の編集も多彩な執筆者に恵まれています。このように多くの先輩の指導と仲間の協力という恵まれた環境の中で仕事をやってきました。そのことを有難く思っています。

また，“La Revuo Orienta”1月号には、和歌山の大会での小坂賞受賞記念講演会で話した“Eldoni esperante”が掲載されました。こちらの方は3ページと長いのでここには再掲できません。幸い掲載号は余分にもらいましたので、ご希望の方には差し上げます。ご連絡ください。

ところで、小坂狷二は、私が学習に使った『エスペラント捷径(しょうけい)』の著者です。私は1960年に独習を始めましたが、当時は、大学書林の『エスペラント四週間』以外には、この『捷径』しかありませんでした。高校生の時に『四週間』で独習を試みましたが挫折していました。この『捷径』は、戦前に書かれたもので古風な言葉遣いでしたが、短時間にエスペラントの全体像が掴めるようになっていて、私はこの本でエスペラントの基礎を習得できたと思っています。もちろん、この本は現在では絶版で買うことができません。また、2005年、小坂狷二の子息の小坂丈予(Gojo)さんが東京の谷中墓地にある小坂家の墓に、父の業績を記した石碑をエスペラントと日本語で作るのでその碑文の添削をして欲しいという依頼が人づてにあり、そのお手伝いをさせていただいたことにも、何かのつながりを感じています。



Sildo de Ossaka-Premio

Japana Esperanto-Kongreso



Ĉe la premiigo; kun s-roj Huĝimoto Tacuo kaj Ŝibajama Jun'iči

正月の酒

曲田 忠房

今年もまた、正月だけ許されている朝風呂朝酒で三が日を過ごした。飲みたいときに飲み食いたいときに食い、寝たくなれば寝るような生活が体に良くないのは分かっているのだけれど、これは生活するうえでの儀式だと思っている。したがってこの間は、女房がいやらしい目つきで私を見ることもない。歳とともに胃袋は収縮し、少しずつ酒量は衰えてきているけれど、それでも家族の協力などもあり年末に用意した数本の一升瓶は空になった。景気の低迷と日本酒離れにより、中小の酒蔵が倒産に追い込まれているので多少なりとも景気浮揚に役立ったものと思っているのだが、ささやかなものでしかない。

3日までは家族や友人が相手をしてくれたけれど、4日からは誰も相手をしてくれないので、図書館から借りてきた新書の「貧困大国アメリカ」を読みながら一人手酌酒で飲んだ。この本には、アメリカの金融資本が約款も読めない移民にむなしいアメリカンドリームを見せて、ローンを組ませ破産に追いやっていった事例や、一食あたり 150 円の食事券で生活する貧困層、高カロリーの学校給食で肥満化する子供たち、

また移民の若者たちを国籍の取得や奨学金の支給といったエサで釣り兵役につかせてイラクに送り出し、除隊した後は医療保険もない状態で放り出すやり方も書かれている。アメリカ金融資本は戦争ビジネスによる兵器産業の拡大で利潤を得るだけではならず、貧困ビジネスという新しい手口により低所得者層を破産させ、ドルの循環を拡大してきたことになる。

二十代の頃に読んだレーニンの「帝国主義論」には、帝国主義とは金融資本が国家および世界を支配することであると書いてある。そのアメリカ金融資本が崩壊した。当時デモの後ろにくっついて“アメリカ帝国主義打倒”のこぶしを振り上げていた私としては、まことにめでたい事態到来ということだが、そうもいかないところが悲しい。世界を牛耳ってきたアメリカ帝国が崩壊すれば、世界は混乱するし多くの犠牲者が出ることになる。その犠牲は真っ先に弱者のところに降りかかってくる。

ニッポン帝国が無謀な戦争を起こして敗北し崩壊したとき私は5歳だったが、食糧難による栄養失調で死ぬような思いをした。やせ細った手足に腹だけが異常に膨らみ体には無数のできものができていた。そのときの傷跡は今でも残っていて、風呂に入ったときなどその傷跡が目に入ると、そのころのことを思い出す。

今回の金融危機ではあの頃ほどの混乱にはならないだろうが、ある程度の犠牲を強いられるのかと思うと気が重い。それでも帝国の崩壊は世界の平和のためには喜ばしいことであり、アメリカの表舞台からの退場を願っているのだが、そうはいかないようだ。対極する国がなくなり、世界中の国が混乱を避けてアメリカを支援しようとしている。アメリカ国民も帝国の維持を願って新しい大統領を選んだので、帝国はある程度弱体化しても復活するのだろう。したがって来年の正月も、朝湯朝酒を楽しむことができるだろう。しかし、何か欲求不満の気持ちが残る。

一茶の句を借りれば、“めでたさもちゅう位なりおらが春”ということなのだろう。一茶が生きた北信濃で中位といえは「いいかげん」という意味がある。うつうつと一人飲む酒は、消化不良で腹が膨れる。

En E P A Transjara Kurskunveno de Esperanto に参加

この講習会は、毎年 12/30~1/2 の日程で、大本本部（京都府亀岡市）を会場に開催されているが、今回私は 2 回目の参加をした。はりまエスペラント会関係では、私以外に 6 人が参加（部分参加含む）。30 日朝、大本教主の出口紅様のエスペラント語による歓迎挨拶に始まり、海外参加者 13 名を含む総勢 100 人が 7 班に分かれて、4 日間の学習生活を楽しんだ。今回は講師陣として、ローマン・ドブジンスキー氏（元世界エスペラント協会副会長、「ザ・マンホフ通り」の著者）、ミレイユ・グロジャン氏（世界エスペラント協会エスペラント検定試験委員長、アティリオ・オレラン・ロヤス氏（国際エスペラント教師連盟事務局長、イー・チュンギ氏（ソウルエスペラント文化学院院長、アジアエスペラント協会会長）、ジョゼ・カンポス・プレタス=竹原如是氏（元京都外大教授）などが指導に当り、韓国からの受講生 9 名と共に、国際色豊かな Kurskunveno となった。

私は、竹原如是先生の班に入り、韓国の女性 3 人を含む 12 人で学習親交を深めた。取り分け有難かったのは、ポルトガル生まれの如是講師が、ポルトガル語は勿論、日本語、エスペラント、韓国語、その他諸々の言語に精通、講義・質疑でも最後には相手に理解出来る語での詰めをしてくれることで、お陰でエス語能力の頼りない私にも、韓国女性との交流に困る事はなかった。竹原先生手作りのテキストも、上記 4 言語で並記され、時には、韓国語ハングルの勉強や、日本語の勉強に話題が弾んで、楽しく 4 日間が過ぎた。

なお、ローマン・ドブジンスキー氏は、これから半年ばかり日本に滞在、取材活動を続ける由で、またご縁を得る場面があるかも知れない。

久保田俱視

Vizito al Hoŭei-juku

峰 芳隆

12月23日、萌叡塾（ほうえいじゅく）で開催された福井のザメンホフ祭に参加しました。萌叡塾は、福井市の北東の山間部にある、10人近くが自給自足の生活をしている共同体です。そのメンバーの多くがエスペランティストで、一度訪ねたいと思っていました。福井駅から九頭竜線で美山駅まで行き、そこから出迎えに来てくれた旧知の島洋子さんの車で20分のところにありました。

古い木造を改築した建物で、家の周りには暖房用の薪が積まれています。暖房は薪ストーブです。冬は深い雪に埋もれるそうですが、この日はまだありませんでした。ニワトリが自然の中で飼われているのも懐かしい風景です。農薬や化学肥料を使わない農業が主な仕事で、地下室には収穫物が貯蔵されていました。パンやケーキを焼くための石窯もありました。塾生は東京などの都会から移り住み、農耕だけでなく、それぞれに竹細工、建具、機織、着物のリフォームなどを行っているそうです。昼食の自然食をいただいた喫茶室は壁一面が本棚で、塾は時間がゆったり流れている懐かしい空間でした。

ザメンホフ祭に参加したのは塾の5人と福井県の各地から車で来た9人に私たち夫婦を加えた16人でした。私は請われて「宮沢賢治とエスペラント」とエロシェンコの話を話しました。



(写真は萌叡塾の前で。家の周りには薪が積まれている)

学習例会の記録と予定

Kiam, kie, kiuj kune ni lernis kaj lernos?

実績（出席者）

<加古川：加古川総合文化センター>

10月19日：馬場，坂本，多田，曲田，峰

11月16日：坂本，多田，曲田，南場，松田，峰

<姫路：イーグレひめじの国際交流センター>

10月23日（大本はりま本苑）：小西，大前，中村，久保田，竹田，吉田

11月27日（イーグレひめじ）：大前，中村，久保田，竹田，木根，峰

今後の予定（1月～3月）

★ 姫路（いずれも第3木曜日，午後2時～4時，イーグレひめじの国際交流センター第4会議室） 1月15日， 2月19日， 3月19日
4月も第3木曜日の予定です。ご注意ください。

★ 加古川1月18日、2月15日（いずれも第3日曜日，午後2時～4時，加古川総合文化センター会議室3）3月15日（図書館2階・サークル室3）4月は12日か26日の予定です（19日は中村さんのコンサートがあるため）。5月だけは第4日曜日になる予定です。

★ 3月8日（日），姫路国際交流センターの「スプリングフェスティバル」に参加する予定です。今年は，昨年の展示のほか，別室を確保して1時間体験講座などの「ワークショップ」を開催する予定です。

編集ノート

* Kio mi estas? は久保田さんの1問だけでしたので今回は休みました。次回、多くの投稿を期待しています。また、坂本さんの“Etaj demandoj”の質問状は紙面の関係で割愛させていただきました。

* 今回も多くの原稿ありがとうございました。次回は4月6日までに。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

“Verda Placo”（みどりのひろば） n-ro 4 2009年1月16日

発行： はりまエスペラント会 代表 峰 芳隆 高砂市北浜北脇 29-16

編集： 南場 敏郎 加古川市平岡町山の上 684-33 13A-102

nanba.tosiro@w8.dion.ne.jp

エスペラント



Verda Placo

printempo 2009

みどりのひろば

2009年 春

N-ro 5

Harima Esperanto-Societo (はりまエスペラント会)



折り紙 竹田 華恵さん

Paperaj Pupoj faritaj de s-ino Takeda Hanae

Kio estas ONIJOŬZU (鬼揚子) ?

TADA Rjuĵi

Legendo diras, ke komencigô de Onijoŭzu estas eble en la epoko de Heian-ĉoŭ. Kiam la unua filo estas naskita, la familio faras ĝin por lia sano kaj bona kreskado, kiel Onijoŭzu flugas supren potence en la granda ĉielo.

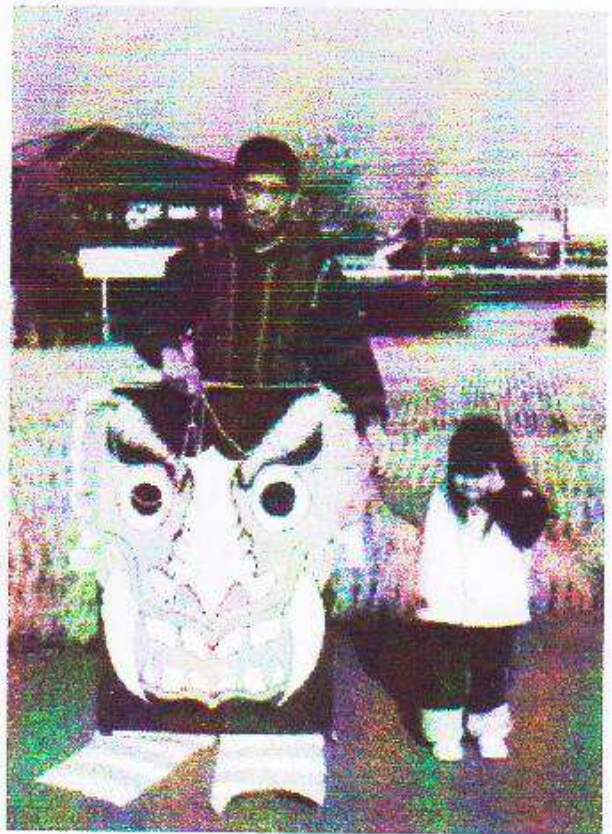
Ĉe la lasta tago de la jaro la parencoj kaj konatoj de la familio donacas materialojn de Onijoŭzu, kaj ĉiuj kune faras ĝin. Ĉiuj flugigas ĝin en la bona tago de januaro por gratulo.

Jen, Onijoŭzu estasflugdrako en Miŝima de la urbo Hagi en la gubernio Jamaguĉi. Vizaĝo de ogro estas pentrita por defendi la filon kontraŭ diversaj malbonoj.

Oni metas ĝin en vestiblo de sia domo por defendi kontraŭ malbonoj. Vendejo metas ĝin por prospero de komercado. Fadeno de laflugdrako estas nomata MEIMA(迷磨). Gi havas nur tri kolorojn, ruĝan, verdan kaj nigran. Okaze de Secubun en templo de Kioto, ruĝaj, verdaj kaj nigraj ogroj estas forpelitaj per sojfaboj. Budhistoj diras SANDOKU (三毒) en la budha mondo. Sandoku esprimiĝas de ruĝa, verda kaj nigra koloroj.

La koloroj de Onijoŭzu devenas de tio. Origine, kiam la unua filo (惣領 = 跡取り) estas naskita, Onijoŭzu fariĝas granda, sep-ok fojojn de tatamo por lia sano kaj bona kreskado. Bildo de ĝia vizaĝo estas diferenca laŭ respektiva familio. Kiam oni vidas flugantanflugdrakon, oni povas ekscii laŭ la bildo, al kiu familio ĝi apartenas.

Foto: mia nepino kaj mi estas kune faranta Onijoŭzu.



Enigmo: Kio mi estas.

N-ro 1 de KUBOTA Tomomi

Mi toroviĝas en turisma loko antaŭ longe, tamen nuntempe ankaŭ en proksima urbo. Oni amas min precipe en vintro pro mia varmeco. En turisma afiŝejo ofte mi estas desegnita kun vapore. Mi atendas vian viziton kun amato baldaŭan.

N-ro 2 de SAKAMOTO Toŝiaki

Mi loĝas en kuirejo de preskaŭ ĉirukaŭ ĉiuj domoj. Mia korpo estas metala, kaj tro grasece dika formo, nome malalta kaj ronda. Mi trinkas multe da akvo en mian ventron. Mia dommastrino metas min sur la fajron de la kuirilo. Mia sidvango estas ŝtata de granda fajro. Sed mi eltenas tion. Oni ofte komparas min al senhara kapo de sinjoroj.

N-ro 3 de SAKAMOTO Toŝiaki

Mi laboras ĉefe en nokto aŭ malhela loko, sed ne estas ŝtelisto. Mi havas formon de rekta aŭ ringa tubo. Oni povas vidi min eĉ en via ĉambro. Nun en via ĉambro mi troviĝas, sed mi estas malofte rekte nevidebla, ĉar mi estas ofte kovrita de kovrilo. Vi vidu supren plafonon. Kion vi trovas? Jes, vi vidas lumigilojn. En tiu loko mi estas kaŝita. Aŭ ĉu vi vidas min nudan?

N-ro 4 de NANBA Toŝiro

Mi povas palori kvazaŭ buŝo. Kelkfoje skvamo falas el mi. Oni diras ke mi estas fenestro de la koro, kaj for de mi, for de la koro. (去るものは日々に疎し) Oni povas vidi belan pejzaĝon.

N-ro 5 de NANBA Toŝiro

Mi estas vivis sur la terglobo. Kiam mi mortis, mi rapide kovriĝis per la ŝlimo kaj sablo, kaj mi malmoliĝis kiel ŝtono. Klkfoje ekzistas ankaŭ mi, kiu ne malmoliĝas. Mi origine signifas elfositan objekto.

Solvo n-ro1: varma fonto, n-ro2: bolpoto, aŭ bolilo,
n-ro3: fluoreskaj lampoj n-ro4: okuloj n-ro5: fosilio

Rememoro de mia patrino (4)

BABA Tokie

Antaŭ kerkaj jaroj mi legis iun artikolon de “Vojaĝanto de kanto” en la tagĵurnalo Asahi. Ĝi estas “Kanto de patrino”. Ĉu vi rememoras la kanton? Ĉu vi ne kantas ĝin antaŭ multaj jaroj?

“Panjo laboris vespere, trikis miajn gantojn kaj sendis al mi”.

Ankaŭ mia patrino amis trikadon. Kiam aŭtuno venis, ŝi maltrikis malnovajn trikaĵojn. Ŝi lavis la lantadenon kaj denove trikis trikaĵojn por mia grandeco. Kiam mi fariĝis mezlerneano, ŝi aĉetis novan bruon lanfadenon por mi. Mi rememoras, ke mi estis tre ĝoja kaj feliĉa.

Patrino trikis:

apude mi, knabino

revas pri mi mem.

Tankaŭoj de Montano

峰 芳隆

これは、2004年8月から2008年4月にかけて *La Movado* に3か月毎に連載された「モバード歌壇」に筆名 *Montano* で投稿し、掲載された tankaŭoj です。同誌では藤本達生さんを選者にして「歌壇」を始めましたが、初めは投稿者が少ないため、編集部員の私がサクラとして筆名で投稿しました。しかし、いつまで経っても増えないので、結局最後まで続けてしまいました。

藤本さんは、当時、短歌誌『塔』の会員で、会うと短歌の原稿を見せてもらいました。この時の会話の中から、エスペラントでも短歌をとということで、「モバード歌壇」が生まれました。私自身、好きでしたが、作ったことはほとんどありません。しかも、エスペラントの短歌です。手探りで作り始めました。

短歌と同じ5・7・5・7・7の31音節 (31 silaboj) というのが唯一の規則です (もっとも、なかには字余りや字足らずもあります)。万葉集や百人一首、それに啄木を翻訳した故宮本正男などは、エスペラントの詩として、原作でも韻 (rimo) を踏んだ tankaŭoj を残していますが、それは難しいのであきらめました。せめて、リズムだけでも整えたいと試みたのですが、それもあまりうまくいきませんでした。余談ですが、*La Movado* 連載の Laŭlum (=李士俊さん) の Vortaro por Lernantoj の4行詩は、ほとんどすべて韻を踏みリズムも整っています。

Foran memoron
vekas maro ondanta
el tag' pasinta:
Skuetis mian koron
larmoj de l' amatino.

Soleco ŝvelas
subite inter homoj
paŝantaj gaje —
en nekonata urbo
mi vagas sen amikoj.

Sub vintra suno
knabino sangan floron
surbruste portis;
flamigis mian koron
enigma ŝia ridet'.

Feliĉaj estas
miaj sesdek vivjaroj
sen soldatservo
dank' al la artikolo naŭ.
Se ne, mi ne eltenus.

Ĉu iluzio?
Helblua flamo brulas
en ŝtona vazo.
Jen ruĝe, blanke floras
kamelioj en frosto.

Buntas nuance
aŭtuna foliaro
de sakur-arboj.
Trankvilas mia koro
post diskuto senfina.

Pomon, tomaton,
fragon, kivon, oranĝon,
ankaŭ melonon
tra la jaro mi manĝas
tute sen la sezono.

La avo kreis
la lingvon por la homar';
Miloj da homoj
en Litovi' aŭskultas
paroladon de l' nepo.

Vortojn de l' avo
citis la nepon jarojn
cent poste en Viln':
Ne kunvenis poloj kun rusoj,
sed homoj kun homoj.

Ebena estas
Litovi' sen montaro
diris ĉiĉeron' —
Mi supre de monteto
vidas la horizonton

Onklo de l' nordo
parolis telefone:
arboj de ume',
sakuro, abrikoto
samtempe floras en maj'.

Onkl' okdek-jara
en Hokajdo solvivas,
vagas matene
en kamparo kun hundo,
tagon pentras ĝardene.

Raportis ĝoje
amik' en Hirosono
Mesaĝoj venis
cent kelkdek el la mondo
por l' artikolo naŭa.

De la Kongreso
Tokia pasis jaroj
kvardek du. Dume
maljunas kolegaro.
Nin tamen, kiuj sekvas?

Inunde pluvas,
ekstersezone neĝas,
tornado ventas.
La tero furiozas —
Ĉu puni la homaron?

En maja suno
acera foliaro
helverdas sorĉe.
Revenas memoreto
juneca kun amaro.

Per kio ŝtopu
malplenan mian koron
post disputado?
Argumentado vanas,
nek pledo oratora.

Radioj falas
el nubaro fruin tra
sur grizan maron.
Kuras strio da briraj
ondetoj vivamtaĝe.

Tranĉas boato
blanke brilantajn ondojn
for de haveno.
Sorĉite mi sur klifo
malproksimen rigardas.

“Demian” - libron
ŝatatan en juneco
sentimentala
relegas mi post jaroj
kvindek en Esperanto.

Kien foriris
tamen tia pasio
de junaj tagoj?
Mi sekvas frazon post fraz'
kun nostalgi' amara.



ルリタテハ
(権現ダムにて)

第5回国際交流スプリングフェスティバル

3月8日(日)、姫路国際交流センターで開催された「第5回国際交流スプリングフェスティバル」に参加しました。一昨年と昨年に続いて、3回目です。今年は、展示だけでなく、部屋を使つてのワークショップとして、体験講座を開催することにしました。ワークショップの場合には、その案内チラシをフェスティバルの広報冊子に綴じ込んでもえるというので、そのチラシも作りましたが・・・。

割り当てられた部屋は、第3会議室です。いつも例会に使っている第4会議室よりも大きく、備え付けのスクリーンもありました。しかし、会議室の一番奥で、部屋をのぞきに来る人はほとんどなく、結局受講者なし。結局、集まった会員だけのDVD鑑賞会になってしまいました。パソコンとプロジェクタで上映したのは、次の映画(DVD)です。

“Gerda malaperis”, “La Patro”, “La Duonokulvitro”, “Esperanto - Pasporto al la tuta mondo”

このうち、“Gerda malaperis”は長編劇映画で、それなりに好評だったのですが、途中で写らなくなり最後まで見る事ができませんでした。原因は不明ですが、事前の確認ミスでした。お詫びします。

“La Patro”は、菊池寛の「父帰る」のエスペラント訳を翻案してブラジルで制作された短編劇映画で、日本語の字幕付ですが、この日本語訳がお粗末なもので、悪評でした。



「展示」の方は、昨年のをほとんどそのまま使いました。しかし、これも、やはりまずかったと思います。いずれにしても、今年は準備不足で、折角のチャンスを生かせなかったことを反省しています。

当日の参加者は、稲田、小西美、小西成、坂本、佐野、竹田、中村、南場、馬場、松田の皆さん。このほか、元会員の川平憲秋さんと内海高子さん、東二見の塚本猛さんも来てくれました。前日の準備には、竹田さんと坂本さん。また、

12月と1月に開催された国際交流センターの準備会には稲田さんに出席してもらいました。なお、この写真には全員が写っていません。うっかりしていました。ということで、今年は失敗の連続した。

峰 芳隆



写真の中央が塚本さん

(山陽電車の中で、エスペラントの雑誌を読んでいた私に声をかけてきた人です)

La Unua Koncerto de Mano



中村雅子さんのコンサートが、4月19日午後、イーグレひめじ地下の「アートホール」で開催されました。

案内状とプログラムの表紙の版画（写真参照：中村雅子さんの友人の上野厚子さん作）に、「まあの la unua koncerto」と記されているように、初めてのコンサートということです。「まあの」は、「まさこ」とエスペラントの *mano* から付けた演奏者としての名前だそうで、お話の中でも、版画では「手」を彫るのが好きなので、「エスペラントで手の意味の *mano* から付けました」と話されました。そういえば、Verda Placo N-ro 3の表紙を飾った中村さんの版画も、ウクレレを弾く「手」でした。

コンサートが、「Saluton! Mi estas Nakamura Masako.」という挨拶で始まったのには驚きました。そして、最初の歌と次の歌の間には、外国や外国人と家に泊めた経験から、世界共通語のエスペラントの学習を始ました、今日お配りした中にエスペラントについての資料があるので、それを読んでエスペラントのことを皆さんにも知ってほしい、と話されました。その配布資料というのは、日本エスペラント学会制作のチラシ「ホントの国際語ってなんだろう？」とはりまエスペラ

ント会が3月のスプリング・フェスティバルで配布したチラシで、中村さんから依頼されて提供しました。

中村さんが歌った10曲のほとんどは、中村さんが作詞作曲したものです。それを、ウクレレ、ギター、ピアノ、バイオリンと楽器を取替えて、それを弾きながら歌うという多才ぶりには驚きました。歌詞がよく聞き取れる透明感のある美しい声の響きも魅力的でした。初めてのコンサートということですが、なかなか落ち着いて、トークも楽しく心に響くものでした。アンコールに歌ったのは、昨年12月のザメンホフ祭の時の「風の向こう」でした（本誌第4号掲載）。

120席の「アートホール」は、ほとんど満席の盛況でしたが、はりまエスペラント会からの参加が、馬場さんと曲田さんと峰の3人だったのは、すこし残念でした。次の機会には、ぜひ、と皆さんにお勧めします。
(峰芳隆)



はりまエスペラント会 2008年の活動記録

Nia agado en 2008

- 2月：インドで開催された第5回アジア・エスペラント大会に、大前知子さん、久保田俱視さん、吉田信子さん参加。
- 3月9日：姫路国際交流センターの第4回スプリング・フェスティバルの展示に参加。
- 3月22日-23日：ドイツの s-ro Michael Woter 来訪（峰さん宅に滞在）。
- 4月：会報"Verda Placo"復刊。以降、季刊で計4号発行（7月、10月、1月）
- 4月：姫路国際交流センターの登録団体登録更新。
- 11月10日：フランスの s-ino Michelle Paumier, s-ino Michéle Langeois 来訪（藤井富朗さん宅に滞在）。
- 12月13日：ザメンホフ祭（稲美町 Labo-Espo, 14人）
- 12月26日：イタリアの s-ro Vessella とその家族来訪。

学習例会の記録と予定

Kiam, kie, kiuj kune lernis? Kiam, kie ni kune lemos?

実績 (出席者)

<姫路：国際交流センター>

- 1月15日：大前, 久保田, 小西成, 竹田, 中村, 吉田, 峰
- 2月19日：大前, 小西成, 小西美, 中村, 吉田, 峰
- 3月19日：久保田, 小西成, 小西美, 中村, 吉田, 峰
- 4月16日：大前, 木根, 久保田, 小西成, 吉田, 峰

<加古川：加古川総合文化センター>

- 1月18日：坂本, 多田, 南場, 馬場, 曲田, 松田, 峰
- 2月15日：坂本, 竹田, 多田, 南場, 馬場, 曲田, 峰
- 3月15日：坂本, 多田, 南場, 馬場, 松田, 峰
- 4月26日：

今後の予定 (5月～8月)

★ 姫路

(午後2時～4時, 姫路国際交流センター第4会議室)

- 5月21日, 6月18日 (いずれも第3木曜日)
- 8月27日 (第4木曜日)

前号で4月からは, 以前の第4木曜日に変えると予告しましたが, 5月と6月は引き続き第3木曜日です。

★ 加古川

(午後2時～4時, 加古川総合文化センター会議室3)

- 5月24日 (第4日曜日), 6月21日 (第3日曜日)
- 8月23日 (第4日曜日)

7月は, どちらの会場も夏休みにしましょう。

編集ノート

編集の最終段階の 21 日、朝日新聞の朝刊、トップ記事は兵庫県立高校の入試採点ミスでした。点検や校正の難しさを実感しています。

先月には、関西空港でのトラブル、「英語誤解し誤進入」という記事も目にしました。それによると、「管制官はカナダ機に「Hold short of runway」と指示したが、カナダ機は滑走路内で待つ指示だと聞き間違え、その意味になる「To position」と応答した。一方管制官も操縦士が言った「To」をその場で待機するときに使う「Hold」と言ったと思い、カナダ機が指示を正しく理解して返事したものと思込んだ。」とのこと。どちらもあってはならないミス、思い込みや先入観は怖いものですね。

ところで、「Mondvojaĝo en 79 tagoj」の著者は次のように記述しているのを思い出しました。

La problemo kuŝas en tio, ke la angla havas dudek ses literojn kvardek kvin sonojn kaj, krome, ke unu vorto povas havi foje plurajn signifojn. Mi komprenis, ke tio neniam povas okazi kun Esperanto, kie ĉiu litero prononciĝas nur unumaniere kaj ĉiu vorto havas plej ofte unu solan precizan signifon. Mi komprenis, ke la angla lingvo ne nur ne bone taŭgas por aviado, sed ankaŭ, ke ĝia uzo signifas efektivan danĝeron.

また、英語を母語とする人とそうでない人、発音に癖のある人など、管制官もなかなか大変なことと思います。

今号は、多田さんから山口県萩に伝わる凧の話 ONIJOZŬ、馬場さんから俳句をまじえた“Rememoroj de mia patorino (4)」、峰さんからは過去に作られた短歌が寄せられました。4月には、中村さんのコンサートもありました。

いろいろと原稿、ありがとうございました。

ところでエスペラントでは、短歌は *utao*、川柳は *senrjuo*、俳句は *hajkuo* ではなく *hajko* です。広辞苑によると、俳句は俳諧の句とあります。単に句とも言い、俳句集は句集とも言います。“く”という字(音)を省いてしまうことに違和感を覚えます。どう考えても「hajku」までが語根だと思うのですが・・・

ちなみに落語は *rakugoo* として PIV に登録されているとか。「語根の認定」の基準がよくわかりません。

最後に、お・そ・ま・つ を折り込んだ都々逸(*dodoico*)を

おおき過ぎるか／そっくり返る／まごをカバンが／つれまわる (作者不明)

ピッカピカの1年生、思わず心が和みます。 (Nanba T.)

★★

“Verda Placo” (みどりのひろば) n-ro 5

2009年4月24日

発行：はりまエスペラント会 代表 峰 芳隆 高砂市北浜北脇 29-16

編集：南場 敏郎 加古川市平岡町城の宮 13A-102 nanba.tosiro@w8.dion.ne.jp